VIEW21

2011
February
2月
高校版
Volume
6

CONTENTS

2 私を育てたあの時代、あの出会い

生徒のために強い行動力を持つ大切さを学んだ
和歌山県立星林高校校長◎平松正昭

4 特集

SIを土台に新課程カリキュラムをつくる

6 現状把握 新課程に向けた検討状況

8 座談会❶ 授業の質を高め、生徒の意欲に火を付ける
秋田県立秋田高校、茨城県立土浦第一高校、熊本県立熊本高校

12 座談会❷ 1年次のカリキュラム策定が全カリキュラムの鍵を握る
岩手県立花巻北高校、新潟県立新発田（しばた）高校、静岡県立藤枝東高校

16 指導変革の軌跡

16 岩手県立福岡高校
成績層別指導◎成績層別指導を徹底し生徒の力を引き出して全校的に学力を上げる

20 東京都・私立豊島岡（としまがおか）女子学園中学・高校
進学実績の向上◎授業力を向上し教師への信頼感を高め金レベルの生徒に育てる

24 熊本県立高森高校
チーム・ティーチング◎英語・体育、国語・日本史 異教科連携の授業で生徒の意欲を喚起

28 生きたデータの徹底活用

新担任への効果的な引き継ぎで4月のスタートをスムーズに切る

32 未来をつくる大学の研究室

文化的資本を活用する街づくりで
都市の再生・発展を目指す
大阪市立大大学院 創造都市研究科 佐々木雅幸研究室

36 30代教師の「転んでも起きる!」

生徒の目線で教師の立場から自立的な学習へと導ける授業を模索
三重県立松阪高校◎若宮一哉

38 新課程への助走

対話を重視した授業で自ら学習に向かう力を育む—新課程での英語教育に向けて—

42 大学選択 新たな視点

学生主導型の改革・改善を取り入れる大学

48 VIEW'S SQUARE

本文中のプロフィールは
すべて取材時のものです。
本文中、敬称略。
本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製および転載を禁じます。

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

私を育てた
あの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

生徒のために強い行動力を持つ大切さを学んだ

和歌山県立星林高校校長 平松正昭 HIRAMATSU MASAAKI

「学校を変えたい」という意欲を燃やしながら、果たせずにいた46歳の教務部長は、新たに赴任した校長が掲げる高い理想と、妥協を排してそこに向かう強い行動力を目の当たりにした。その衝撃は、やがて理想の教師像、管理職像として結実したという。和歌山県立星林高校の校長を務める平松正昭先生に、恩師との出会いと成長の日々をうかがった。

1998年度、46歳の私は和歌山県立那賀（なが）高校で教務部長を務めていました。学校全体の閉塞感を感じていたものの、どうしたらよいか分からない状態が続いていました。生徒の容儀の乱れや学力を伸ばし切れていないなどといった課題を抱えつつも、教師集団が一丸となって指導に当たる手立てが見つけられなかったのです。

そんな時、西下博通先生が校長として赴任されました。着任の挨拶で語られた抱負は、「那賀高校を世界に誇れる学校にしたい」。スケールが大き過ぎて、「けったいなことを言う校長さんやな」と驚いたものです。着任直後の職員会議で、ある教員を一喝したことも衝撃でした。「近づきがたい校長」、それが最初の印象でした。しかし、先生が何を目指しているのか、私はすぐに知ることになります。

西下先生は、自らの行動で教師としての範を示していきました。「生徒に守らせようとすることを教師が出来ていなくてどうする」と、朝は誰よりも早く登校し、時間厳守を徹底しました。また各教員に対して、始業時刻に教壇に立っていなかったり、多くの授業を自習にしたりすることがないよう指示するだけでなく、自習となったクラスで自ら進んで講義をしました。折り合いがつかない教員に対しては、粘り強く話し合いを重ねながらも、毅然とした態度を崩しませんでした。そして、わずか1年後には自習はほとんどなくなっていたのです。

「西下先生が那賀高校を変えつつある」という認識は、少しずつですが、確実に浸透していきました。そしてその頃には、私は西下先生の背中に自分の理想の教師像、管理職像を見るようになっていたのです。

西下先生の改革は、和歌山大との連携や、今でいう「総合的な学習の時間」を先取りした活動など、当時としては先進的な取り組みの導入にも及びました。西下先生は教員のやる気をいかに引き出すかを常に考え、どの教員のアイデアにも耳を傾けました。教職員の

先輩教師の言葉

県全体を見渡す広い視野を持ってほしかった

元・開智中学・高校校長
NISHISHITA HIROMICHI 西下博通

校長として那賀高校に赴任するに当たり、同校の様子は一通り把握していました。何よりも教師の規律意識を改めることが課題だと思っていたのです。声を荒らげなければいけない状況もあるだろうと思っていましたし、「たとえ反発を招いても那賀高校を変える」と決意していました。

赴任してみると、「このままの学校ではいけない」と思っている先生がいることはすぐに分かりました。平松先生もその一人で、私が呼び掛けると教務部長としてすぐにカリキュラム改革に尽力してくれました。教科担当が不在のため自習となったクラスで私が授業し始めると、平松先生も率先して授業をしにまわってくれました。そうした姿は、改革を進めようとする私の大きな励みとなったのです。

撮影◎和歌山県立那賀高校にて

ボトムアップと適切なトップダウンの組み合わせが学校を動かすという考えから、意欲のある者は誰でも歓迎しました。

新しい取り組みにより、生徒の成績は向上し、私たち教師はやりがいを感じていました。教師の意識が変われば、授業も進路指導も変わります。西下先生の赴任3年目には、開校以来はじめて国公立大合格者が50名を超えたのです。

西下先生はよく、学校運営を例えて「静かな池に石を投げ入れて波を起こすのも、校長の役割や」とおっしゃっていました。「着任早々の一喝も矢継ぎ早な改革も、学校の閉塞感を打破するためだった」。校長室で私にそう話してくれたこともあります。時には悪者に思われようとも、先を見通した取り組みを推進していく姿勢に、私は頼もしさと信頼を深めていきました。同時に、「いつか西下先生が異動すれば、改革が止まってしまうのではないか」という危惧も覚えました。

「西下先生の情熱を継承し、改革をもっと進めたい」。私の心でそんな思いが日に日に強くなりました。ついに私は、「那賀高校の教頭にしてください」と直訴したのです。ところが西下先生は、「それはあかん」と言下に否定しました。そして、私の気持ちが分かっていたかのように、「本校だけでなく、和歌山県全体のことを考えなければ、管理職は務まらない！」と続けたのです。

振り返ると、西下先生は自校の取り組みを県内に広く発信していました。県の全生徒の学力向上を考えていた西下先生に対し、自校ばかりを意識していた自分の視野の狭さを恥じました。

01年度、私は教頭として新宮高校に赴任し、新たな活動に取り組みました。見ず知らずの土地ではじめての管理職ということもあり、その過程は必ずしもスムーズではなかったものの、「確たる教育理念があれば必ず理解は得られる」という信念が、私を支えてくれました。それは、那賀高校で西下先生が教えてくれたものです。

現在の勤務校、星林高校には赴任3年目。校長として、自校の工夫や改善の仕方を積極的に県内に発信すると共に、他校からのアドバイスも求めています。目指すのは、どの学校も互いの取り組みを参照し合い、和歌山県全体で生徒を育てる環境づくりです。最近になってようやく、西下先生が掲げた理想の意味が、実感として理解できるようになってきたと思います。

右 にしした・ひろみち 国語科。和歌山東高校、和歌山県教育委員会などを経て、校長として那賀高校に3年間勤務後、私立・和歌山県開智中学・高校校長。現在、和歌山県私学審議委員会会長。

左 ひらまつ・まさあき 国語科。笠田高校などを経て、91年度、那賀高校へ。同校に11年間勤務した後、教頭として新宮高校に赴任。県教委、貴志川高校校長などを経て、08年度から星林高校校長。

平松先生は、和歌山大との連携事業や校外への発信活動などの橋渡しもしてくれました。学校のため生徒のためを思って取り組む姿勢から、教師としての情熱は十分に感じていました。

そのため、彼が「那賀高校で教頭になりたい」と言ってくれた時は、ありがたい気持ちでいっぱいでした。しかし管理職に求められるのは、県内を見渡す広い視野です。私は、平松先生に県を担う教育者となってほしいと思っていました。だからこそ、まずは縁もゆかりもない土地で、新しい取り組みをつくってほしいと伝えたのです。平松先生なら出来るはずだと確信していました。実際、新宮高校に教頭として赴任した彼の奮闘は、期待以上でした。

平松先生は現在、国際交流科を持つ星林高校の校長として、国際教育と「ふるさと教育」の融合を進めています。郷土の文化を学んだ生徒を海外に留学させ、和歌山県の素晴らしさを発信しようとしているのです。自校のことだけを考えていたのでは、こうした壮大な取り組みは生まれません。平松先生の目が何を捉えているのか。それは私にも分かりません。彼の視野は、既に私より大きく広がっているのですから。

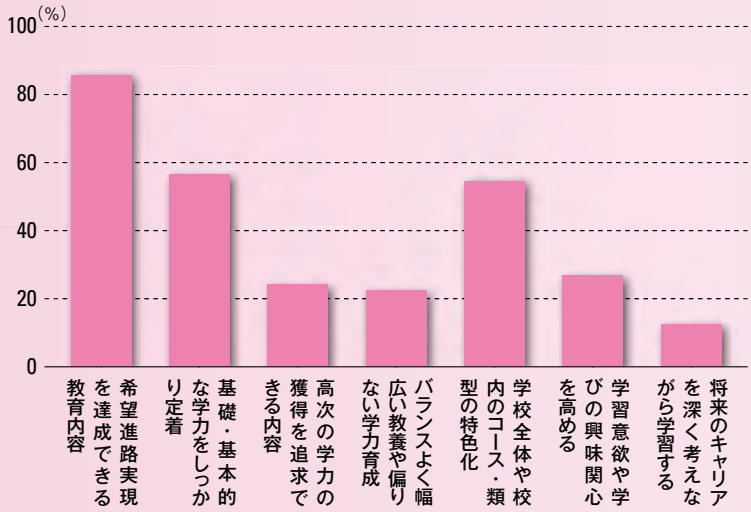
SPECIAL ISSUE

特集

SIを土台に新課程カリキュラムをつくる

各校の教育目標を実現するために、
新課程の制度の中でどのようにカリキュラムを設計すればよいのだろうか。
教師の声を基に考える。

新課程に向けて「大切にしたい視点」は何ですか



＊複数回答
出典／ベネッセコーポレーション高校事業部「新教育課程に関するアンケート」（調査概要は P.6 参照）

「生徒の希望進路の実現」を大切にしたい
という回答が圧倒的に多かった。

1 新課程に向けた予測

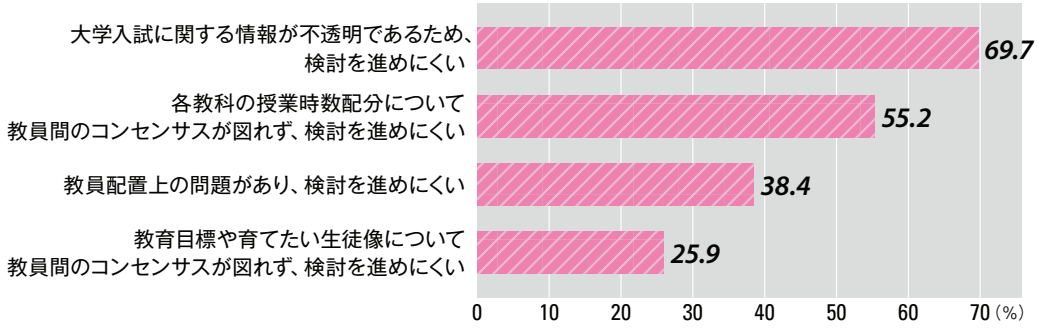
ベネッセコーポレーション高校事業部「新教育課程に関するアンケート」結果より

- 各校の総単位数は、現行課程と同じか、あるいは増える
- 高校入学段階での学力格差が広がる
- 「言語活動の充実」「活用重視の授業」などは、教科により指導にばらつきが出る

2 新課程カリキュラム策定上の課題

【P.6 現状把握】

新課程に向けて校内での検討が前進しにくい要因



＊数値は「とてもあてはまる」「まああてはまる」の合計
出典／ベネッセコーポレーション高校事業部「新教育課程に関するアンケート」

3 課題解決の視点

新課程で授業の質を高める視点

【P.8 座談会❶】

学校目標の達成を支えるベース

- 教える内容を精選し、狙いに合った教材を選ぶ
- 生徒のアウトプットの機会を増やす
- 生徒に深く考えさせる「問い」を投げかける
- 教科書をしっかり読める生徒を育てる
- 授業ですべてを教えきらない

学校目標（SI）の実現

1年次のカリキュラム策定の視点

【P.12 座談会❷】

新課程カリキュラム策定の考え方

- 理科の履修を工夫し、文理選択を判断しやすくする
- 国数英の基礎学力を重視する
- 英語はアウトプット中心の授業から始める
- 学び合いの授業を重視し、学力層拡大に対応

現状把握

新課程に向けた検討状況

大学入試の情報が明らかでない状況で、なかなか前進しない新課程の検討。各校ではどこまで検討が進んでいるのだろうか。弊社のアンケート結果を基に整理する。

学校の状況により重視する方針は異なる

新課程カリキュラム（2013年度）の検討は「ほぼ原案・仮案としてまとまっている」が全体の4分の1（図1）、授業計画（シラバス）の策定は「まだ着手していない」が9割弱を占めた（図2）。

新課程に向けた検討で「大切にしたい視点」（図3）は「希望進路実現の達成」をどのグループも挙げ、次いで、グループ①②は「高次の学力獲得」「幅広い教養や偏りない学力育成」を、グループ③④⑤は「基礎基本の定着」「学校全体やコース、類型の特色化」を重視している。学校が抱える生徒の状況によって、重視する方針が異なることが分かる。

図2 授業計画（シラバス）策定

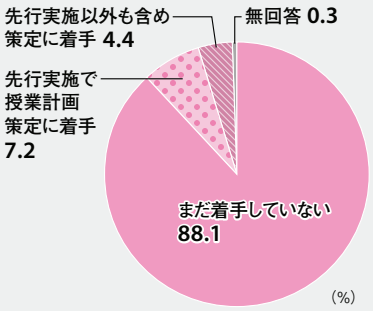


図1 カリキュラムの検討

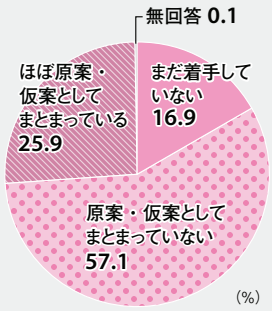
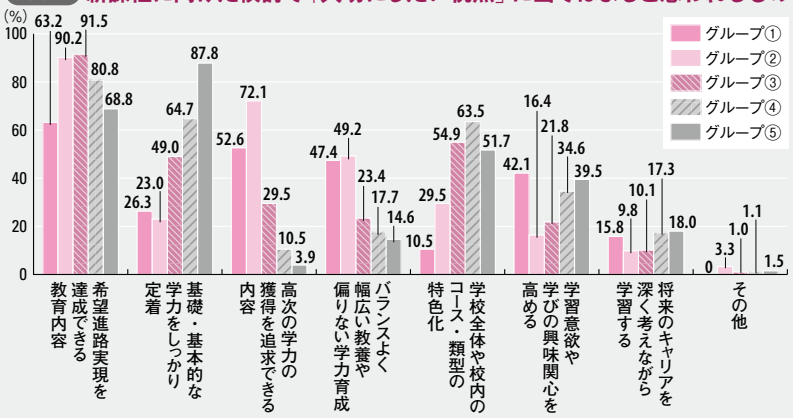
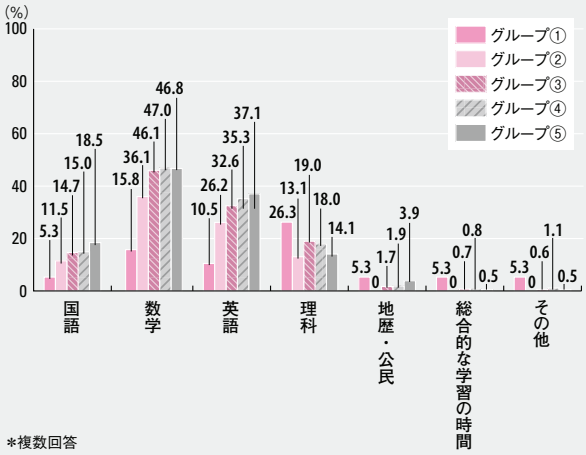


図3 新課程に向けた検討で「大切にしたい視点」に当てはまると思われるもの



*複数回答

図4 中学校の新課程における授業時数・学習内容の増加を考慮した時に高校1年次の段階で重視すべき教科



*複数回答

「新教育課程に関するアンケート」調査概要

◎調査主体：ベネッセコーポレーション高校事業部
◎調査時期：2010年10～11月
◎有効回答数：教務1,457件、数学科担当1,363件（国公立964校、私立446校）
◎学校類型の設定：07～09年度の合格実績・進路状況により5つのグループに分けた（ベネッセコーポレーション「合格者数一覧」「入試結果調査」を使用）

- グループ①は、東京大20人以上、または東京大・京都大60人以上、または20%以上
- グループ②は、難関9大（*1）20%以上、早慶100人以上
- グループ③は、国公立大1%以上、早慶上智・MARCH（*2）30人以上、関関同立（*3）30人以上
- グループ④は、推薦入試での進学が5割以上
- グループ⑤は、就職が1割以上

*1　北海道大、東北大、東京大、東京工業大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大
*2　明治大、青山学院大、立教大、中央大、法政大
*3　関西大、関西学院大、同志社大、立命館大

中学校の新課程を考慮した時に1年次で重視すべき教科は、全体では「数学」が最も多く、次いで「英語」「理科」だった。グループ別に見ると、国数英はグループ⑤が高く、グループ①は最も低い。一方、理科ではその逆の傾向が見られた（図4）。

1年次に理科の履修単位を4単位とする学校が多い

新課程での総単位数は2割が「増加」予定であり（図5）、国公立に比べて私立の方が、どの学年も1～2単位多いことが分かる（図6）。

12年度1年次の理科では、履修単位を4単位分とする学校が3割と最も多かった（図8）。グループ別に見ると、履修予定の科目に違いはあるものの、「化学基礎」「生物基礎」はどのグループも多い（図9）。

数学Aの1年次の選択履修予定は、「場合の数と確率」「整数の性質」「図形の性質」の三つ全部履修が5割強と最も多い（図10）。数Ⅰ・Aの履修予定は、「直列履修」と「並列履修」にほぼ二分された（図11）。

図7 2013年度入学生の1年次の予定単位数

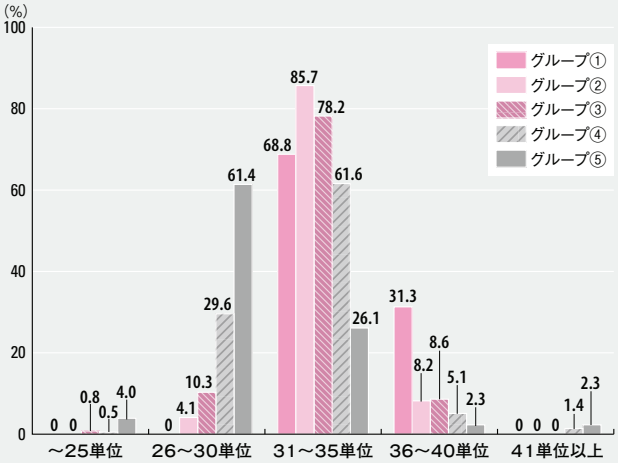


図5 新課程の総単位数
（2013年度入学生の1～3年次の合計）

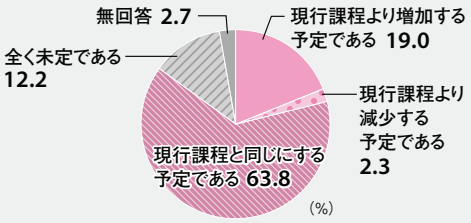


図6 国公私立別・新課程の予定総単位数
（2013年度入学生の1～3年次）

	1年次	2年次	3年次
国公立平均	32.0	32.0	31.7
私立平均	33.6	33.5	32.7

（単位）

図9 2012年度1年次の理科の履修予定科目
（2単位枠のみ）

	科学と人間生活	物理基礎	化学基礎	生物基礎	地学基礎
グループ①	5.3	42.1	42.1	42.1	10.5
グループ②	4.9	24.6	31.1	36.1	1.6
グループ③	5.8	29.6	36.0	41.9	4.5
グループ④	12.0	19.5	35.7	26.3	3.8
グループ⑤	23.9	8.3	21.0	19.0	5.4

30%以上　10%以上30%未満　(%)

図8 2012年度1年次の理科の履修単位数

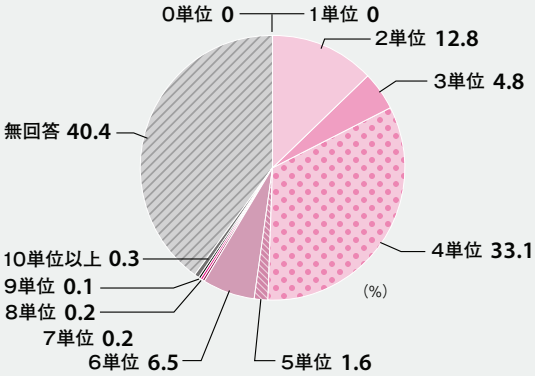


図11 2012年度数学Ⅰ・Aの履修形態の予定

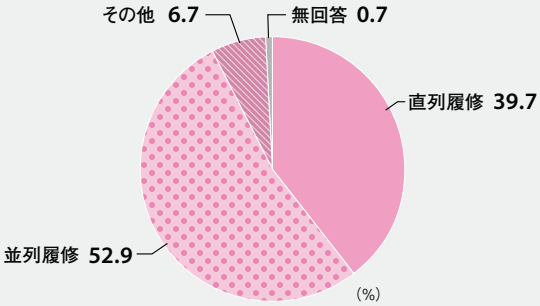
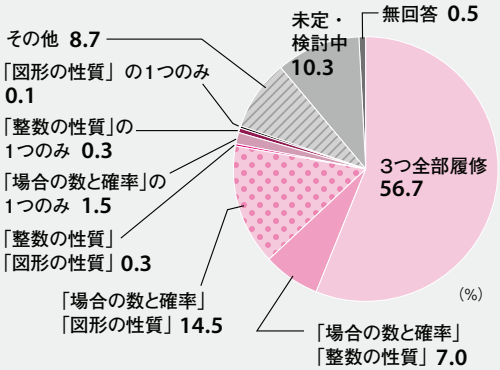


図10 2012年度1年次の数学Aの選択履修予定



座談会 1

学校目標の達成を支えるベース

授業の質を高め、生徒の意欲に火を付ける

伝統校では、学校の指導方針の下で、新課程にどのように対応していくのだろうか。県を代表する伝統校である3校の先生方4人に話を聞いた。

大学入試に偏らない全人教育の伝統を継続

編集部　新課程でのカリキュラム改編を前に、その土台となる学校の指導方針について教えてください。

庄司　秋田高校が目指しているのは「究極の文武両道」です。平日は課外補習を行わず、部活動や生徒会活動に取り組める環境を整えています。そして、部活動や課外活動、学校行事、保健体育や家庭科など入試科目以外の授業にも全力を傾けるよう意識付けをしています。3年間の高校生活を通して、自分に限界をつくらず、何事にも全力で取り組める姿勢を身に付け、社会に貢献できる人材を育てたいと考えています。

臼井　土浦第一高校では「自主・協同・責任」を校訓として、大学入試だけにとらわれない全人教育を目指しています。入学当初から「一高スタイル」として、学習や課外活動に関して主体的・継続的・積極的な態度を涵養し、規律と責任のある生活態度を心掛けさせています。将来の職業として弁護士や医師、研究者などを志望する生徒が多いのですが、入試に特化した指導はせず、平日は部活動の時間を確保し、学習と部活動の両立に取り組ませています。

小坂　熊本高校では、建学以来「士君子の養成」を目標に掲げてきました。2002年に制定したSIでは「深い自己理解のもと、個性を生かし、社会に積極的に関わっていく、自立した個人」と表現しています。本校を訪問した他校の先生から「生徒が大人びて見える」とうかがうことがよくありますが、それは生徒の主体性を生かした活動を心掛けているからだと捉えています。学習だけでなく、部活動や学校行事にも積極的に取り組ませることによって得られる成長が、結果的に大学入試にもつながると考えています。

秋田県立秋田高校
庄司 強 Shoji Tsuyoshi
教務主任。同校に赴任して13年目。2009年度まで進路指導主事を務める。担当教科は数学。

参加校

秋田県立秋田高校
全日制／普通科・理数科／共学／1学年約315人／10年度の進路実績（現浪計）：国公立大は、北海道大14人、東北大59人、東京大16人、京都大4人など計248人が合格。私立大は慶應義塾大、早稲田大などに延べ388人が合格。

茨城県立土浦第一高校
全日制・定時制／普通科／共学／1学年約320人／10年度の進路実績（現浪計）：国公立大は、東北大15人、筑波大42人、東京大24人、一橋大11人など計185人が合格。私立大は上智大、慶應義塾大、東京理科大、早稲田大などに延べ684人が合格。

熊本県立熊本高校
全日制／普通科／共学／1学年約400人／10年度の進路実績（現浪計）：国公立大は、東京大14人、京都大9人、大阪大8人、九州大54人など計306人が合格。私立大は慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ382人が合格。

秋田県立秋田高校
小松弘樹 Komatsu Hiroki
進路指導主事。同校に赴任して3年目。担当教科は地理。

時間をかけても学力が高まるわけではない

編集部　各校とも大学入試に特化しない全人教育を目指されています。目標を達成する上で課題に感じられていることはありますか。

小松　家庭学習時間の確保は大きな課題です。特に秋田県の公立高校の学区が全県一区になってから、通学に時間を取られ、学習と部活動の両立に悩む生徒が増えました。卒業生は「部活動の経験があったから勉強も頑張れた」「部活動の達成感があるから受験に向かえる」と自らの体験を後輩に語りますが、在校生にはそうした実感がまだないので不安を抱いています。自分の限界を超えた先に成長があることを、我々教師がきちんと伝えなければならないでしょう。

臼井　学習と部活動の両立は、本校でも課題の一つです。知的好奇心の強い生徒は部活動にも積極的ですが、1年生から予習・復習にきちんと取り組まなければ授業についてこられません。そのため、1、2年生には宿題以外の家庭学習に3時間は取り組んでほしいと考えていますが、実際は2時間にも達していません。部活動が学習によい効果をもたらすことは事実です。しかし、一定の時間の中で全力で取り組ませることも大切です。本校では、完全下校時刻を設定するなどして、部活動の時間にある程度歯止めをかけています。

茨城県立土浦第一高校
臼井健司 Usui Kenji
進路指導副主任。同校に赴任して10年目。担当教科は生物。

小坂　時間をかければ学力が高まるというわけではありません。特に、補習はドリル学習に終始する危険性があります。ドリル学習は公式を覚えて例題や類題の数をこなすうちに入試問題も解けるようになるだろうという期待の下に行いますが、実際には思うような成果は得られません。学力が上がらない割に時間が取られることや、勉強させているから大丈夫だろうと教師が安心してしまうことなど、マイナス面の方が大きいと思います。

庄司　私も同感です。最終的には自分で学び、考える生徒を育てるのが教師の使命です。生徒自身に「なぜそれを勉強するのか」という動機がなければ、我々が求める真の学力の育成には結び付かないでしょう。

熊本県立熊本高校
小坂和海 kosaka Kazumi
進路指導主事。同校に赴任して8年目。担当教科は数学。

教師の情熱的な語り口が生徒の意欲に火を付ける

編集部　課外補習をせず、部活動の時間も確保するためには、授業でより高い学習効果を上げる必要があると思います。どのような工夫が考えられますか。

臼井　生徒の学習意欲をいかに高めるかが重要だと思います。意欲が低いままであれば、いくら学習させても学力の伸びには限界があるのではないでしょうか。科目に関連した最新の話題をどんどん授業に取り入れて、生徒の知的好奇心を刺激する。

あるいは、将来の夢や志を育てるような話題を提供する、といった工夫が必要です。

小坂　担当教科が好きで、魅力を感じ続けている教師の授業は、面白いですよね。私の担当教科である数学を例にすると、関数は一見複雑ですが、実は増えるか、減るか、変わらないかの三つしかありません。それがどのように変化するのかを、人間は何百年にもわたり繰り返し考えてきました。抽象的な数学の世界にそうした人間の英知が凝縮されていることが間接的にでも伝われば、生徒の知的好奇心は高まると思います。

臼井　同感です。私が高校時代に初めて微積分を習った時、教師が歴史的な背景を踏まえて情熱的に話しているのを聞いて、「数学はこんなに魅力のある学問なのか」と感じたことを今でも覚えています。教師がその教科を愛しているという思いがにじみ出るような授業が、生徒に感動を与えるのではないでしょうか。

教師が辛抱強く「待つ」指導

庄司　授業中に生徒自身が考える場面をつくることも大切です。授業時間が限られていることもあり、ともすれば教師は教え過ぎるきらいがあります。しかし、授業ですべてを教えることが不可能である以上、生徒が自主的に勉強に向かうよう、興味・関心を高めていくことの方が重要です。そのためには、教師が辛抱強く「待つ」ことも必要です。例えば、授業の残り時間が5分になった時、結論はわざと言わずに宿題にして授業を終えるという手法も有効なのではないでしょうか。考える時間を与えることで学びの内容に関心が高まり、教師の問いかけに応えようとする生徒が出てくるはずです。

小松　私は、大学入試問題が生徒の学習意欲を高めるとても良い材料だと考えています。大学の研究内容を紹介して生徒の知的好奇心を刺激するだけでなく、入試問題の出題意図や解答のプロセスを授業で分析、解説することで、生徒は「問題を解けるようになりたい」という気持ちが強くなります。大学に進学したいと希望する生徒に対して、我々はその意欲に授業で応えなければなりません。「大学入試を利用して生徒を育てる」という発想も必要ではないでしょうか。

教科書をきちんと読める生徒を育てる

編集部　新課程では数学・理科を中心に学習内容が増えるため、今まで以上に授業の質を高める必要があると思います。新課程を機に授業をどう改善すればよいのでしょうか。

庄司　新課程で重視する力の一つに、文章読解力・表現力の向上があります。担当教科の数学では、解答を板書させると日本語を書かずに数式の羅列で済ませる生徒がいたり、文章題の意味を正確に読み取れない生徒がいたりします。新課程を機に生徒による発表の機会を増やし、生徒の弱点である読解力や表現力を高めていきたいと考えています。

小松　書いたり発表したりするためには、教えられた知識に加え、自分の持っている知識を組み合わせて考え、解釈した上でアウトプットをしなければなりません。「自分はこう考える、なぜならば……」というように、アウトプットの機会を増やすことによって生徒の「考える」機会を増やすことが出来れば、必然的に授業の質の向上にもつながるのではないでしょうか。

臼井　生徒に考えさせるためには、教師が投げかける「問い」が重要です。一つの答えを導き出すための問

いではなく、広く深く考えさせるために問いかけの質を高めなければなりません。

小坂 教科書をきちんと読める生徒を育てることも重要になると思います。数学では「整数の性質」という単元が新たに加わりますが、これまで誰も教えたことのない単元ということもあり、新課程の教科書ではスモールステップにして、生徒が無理なく理解できるよう丁寧に解説が書かれているようです。これまでは、こうした説明を飛ばして公式や定義だけを教え、例題に取り組ませるような教科書が好まれていました。新課程では、導入部分で単元を学ぶ意味が述べてあったり、理論を丁寧に積み上げ定義を導いたりというように、きちんと読み込むことで、数学の原理や魅力が伝わる教科書が増えるかもしれません。我々が良い教科書を選ぶことが前提にはなりますが、生徒にしっかり教科書を読み込ませることによって、教科の魅力に気付かせることが出来ると期待しています。

教える内容を精選し、授業ですべてを教えきらない

編集部 考えさせたり発表させたりする機会を増やすと、授業の進度が遅くなるのではないでしょうか。

小松 確かに進度は遅くなりますが、それでも考えさせることは、生徒の学びの質を高めるために必要です。教材を精選したり授業にメリハリをつけたりすることで、時間の捻出は可能なはずです。生徒は「ここは授業で習っていない」と思うかもしれませんが、授業ですべてを教えきってしまうのではなく、生徒に自分で調べて学ぶための糸口を与え、深く考える楽しさや面白さを経験させる。それが私たち教師の目指すべき授業であり、「力の付く授業」だと考えます。

臼井 私も新課程では授業で教える内容を精選する必要があると感じています。担当科目の生物は教える内容が幅広いので難しいのですが、遺伝などは数学の確率の知識を応用して幅広い問題に対応することが出来そうです。ただ一方で、化学や生物では具体的な化学反応や生物の機能をたくさん知っているほど、法則が理解しやすくなるので、考えるための材料を多く与えることも必要です。要点を押さえて効率よく教える部分と、材料を与える部分のバランスをいかに取るかが、授業の質を高める鍵になります。

学校目標の下に教務、進路、各教科が連携を

編集部 新課程に向けたカリキュラムの改編は教務部主体で進められると思いますが、進路指導部や各教科との連携はどう行うべきでしょうか。

小坂 本校では教務と進路指導、各教科による教育課程委員会において、教務が中心となってカリキュラム全体の構築に責任を負う体制をとっています。難しいのは各教科をどのように調整していくのかにあり、教務主任のリーダーシップが重要になるでしょう。

小松 本校も教務を中心に学校全体で考えていくことを基本スタンスにしていますが、その際、忘れてはならないのは学校目標です。カリキュラムはあくまで学校目標を具現化するためのものであり、すべてはそこを起点にして考えるべきではないでしょうか。学校目標と生徒の進路実現を教務、進路、各教科がしっかり踏まえて、連携を取りながらバランスの良いカリキュラムを構築していきたいと思います。

編集部 本日はありがとうございました。

新課程で授業の質を高める視点

- 教える内容を精選し、狙いに合った教材を選ぶ
- 生徒のアウトプットの機会を増やす
- 生徒に深く考えさせる「問い」を投げかける
- 教科書をしっかり読める生徒を育てる
- 授業ですべてを教えきらない

座談会 2

新課程のカリキュラム策定に向けて取り組むべきこと

1年次のカリキュラム策定が全カリキュラムの鍵を握る

学習習慣の未定着や、学力幅の拡大、受け身の生徒の増加などの課題は、進学校でも深刻だ。新課程でのカリキュラム策定で、その課題解決に道筋をつけられるのか、3校の先生方に聞いた。

学習の「量」の確保が各校共通の課題

編集部　各校の教育方針と現行課程における課題を教えてください。

川村　花巻北高校の基本方針は文武両道です。勉強も部活動も、点数や勝ち負けにこだわるだけでなく、真剣に取り組み、心を磨くことが大切だと考えています。そうすれば、結果的に成績が伸び、進路志望も実現できるというのが、本校の共通理解になっています。少ないすき間時間で効率的に家庭学習が出来た生徒は、部活引退後、飛躍的に学力が伸びます。限られた時間をどのように使うのかということも、勉強と部活動の両立を通して学んでほしいと思っています。そこで課題となるのは、家庭学習時間の確保です。2時間が理想ですが、実際には1・5時間程度です。また、学力幅の広がりも深刻で、本校では全国偏差値70を超える生徒と偏差値40前後の生徒が混在しています。全体指導と個別指導をどう組み合わせるのかも考えていかなければなりません。

岩手県立花巻北高校
川村俊彦 Kawamura Toshihiko
教務主任。同校に赴任して9年目。担当教科は化学。

岩手県立花巻北高校
伊東理俊 Ito Masatoshi
進路指導主事。同校に赴任して4年目。担当教科は数学。

後藤　藤枝東高校では、学校でのすべての活動が、生徒の「学力・体力・心力」の三つを育てるためのものであると考えています。大学入試においても、単に合格すればよいという指導はしません。基本的に推薦・AO入試は受けさせず一般入試で勝負

参加校

岩手県立花巻北高校
全日制／普通科／共学／1学年約280人／10年度の進路実績（現浪計）：国公立大は、岩手大52人、東北大15人、秋田大12人など計163人が合格。私立大は岩手医科大、東北学院大、東北薬科大、早稲田大などに延べ172人が合格。

新潟県立新発田（しばた）高校
全日制／普通科・理数科／共学／1学年約320人／10年度の進路実績（現役のみ）：国公立大は、北海道大3人、東北大11人、新潟大64人など計183人が合格。私立大には東北学院大、明治大、早稲田大、立命館大などに延べ334人が合格。

静岡県立藤枝東高校
全日制・定時制／普通科／共学／1学年約280人／10年度の進路実績（現浪計）：国公立大は、北海道大5人、東北大8人、東京大1人、静岡大48人、大阪大6人など計212人が合格。私立大は慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ594人が合格。

させているのも、壁を乗り越える経験が社会に出た後で生きると考えているからです。そのため、1年生では国数英の基礎学力の定着を重視し、一般入試を突破できる力を付けることを意識しています。その分、理社がどうしても後回しになってしまい、3年生で放課後補習を行っても教科書を終えるのに11月までかかることが課題です。また、静岡県では9割の中学生が高校入試対策を塾に依存しているため、多くの生徒に自学自習の習慣が付いていません。早い時期に、暗記だけでなく自分で考える学習スタイルにどう切り替えていくのかということも、重要な観点になっています。

新潟県立新発田高校
伊藤 喬 Ito Takashi
進路指導部長。同校に赴任して6年目。担当教科は生物。

伊藤喬 新発田高校も、人格の形成という観点から文武両道を校是としており、勉強と部活動の両立は課題の一つです。入学直後は緊張感もあってそれなりに家庭学習をしていますが、学期を追うごとにその時間は少なくなっていきます。1年生のうちに身に付けるべき学習習慣が定着していないため、生徒の学力を最後まで伸ばし切れていないことを感じます。部活動の顧問が生徒の学習時間を把握して部活動と自宅学習のバランスに配慮するケースもありますが、学校全体の取り組みにまではなっていません。本校は新潟大への進学希望者が圧倒的に多いため、カリキュラムは国公立大合格を見据えて編成しています。ただし、必ずしも新潟大に特化しているわけではなく、更に上の大学も目指せるカリキュラムにしています。

新潟県立新発田高校
伊藤秀男 Ito Hideo
教務主任。同校に赴任して7年目。担当教科は英語。

生徒の読解、計算のスピードが鈍化

編集部 個々の教科における学力面の課題はありますか。

伊藤秀 担当教科の英語では、生徒が中学校時代にコミュニカティブな学習を積んでいるため、話そうとする意欲やリスニングのスキルは以前よりも優れていると感じています。その半面、語彙力や文法の力は不十分です。何度指導しても同じ間違いをする生徒も目に付きます。中学時代に身に付けておくべき基礎・基本が抜けているようです。

伊東 数学では、単純な計算問題を解くのが遅く、計算ミスが多くなったと思います。以前の教育課程の生徒ならもう終わっているだろうというタイミングで、計算が半分も終わっていない生徒もいます。

静岡県立藤枝東高校
後藤佐登美 Goto Satomi
進路指導主事。同校に赴任して9年目。担当教科は国語。

後藤 国語では現行課程になってから、文章を読むスピードが遅くなりました。センター試験の問題を制限時間の80分で解き切れない生徒も増えています。しかし、ゆとり教育になって生徒の学力が落ちたのかもしれないといっても、それは生徒の責任ではありません。「ゆとり教育世代」をつくってきたのは我々大人であるということを認識し、教育改善に努めていかなければならないと思います。

カリキュラム編成は「1年生」が鍵

編集部　各校とも、学習習慣の未定着や学力幅の拡大が課題のようですが、新課程ではどのようにカリキュラムを工夫していきたいとお考えですか。

川村　新課程で特に課題であるのは理科です。生徒の科目選択のミスマッチを減らすために、私は1年生が重要になると思います。岩手県では物理と化学が弱いということもあり、本校では、理科の教育課程は理系を中心として考え、1年次に物理と化学を学ばせたいと考えています。その上で、2年次に集中的に生物基礎を学ばせ、その後、基礎を付さない科目を選択するという方法を検討しています。今までは、2年生進級時に、物理の授業を受けたこともないのに、「数学が苦手だから物理はやめておこう」という科目選択をする生徒もいました。新課程では理科の基礎3科目を履修した上で4単位科目を選ぶことになるので、ミスマッチは少なくなると期待しています。

伊藤喬　本校では具体的な検討はこれからですが、理科は1年生で物理基礎と生物基礎の両方を履修させようと考えています。それにより、2年生進級時の文理選択に向けて、自分が理系向きか、文系向きかを判断できるのではないかと思います。

導入期の指導がますます重要に

編集部　指導上の工夫としてはどのようなことが考えられますか。

伊藤喬　私は導入期指導が重要なのではないかと考えています。中学校までは学習方法が未熟な生徒が多いので、入学直後に高校での学習の仕方をしっかり教え、出来るだけ早く高校生にさせるのです。その上で、生徒が授業内容をきちんと理解しているのかを単元ごとにチェックしてから先に進むというように丁寧な指導を心掛ける必要があります。

後藤　本校では文理選択が1年生後半にあるので、入学時から学習への意識を高めていくことが重要だと考えています。導入期指導で高校生としての学習スタイルを身に付けさせ、その緊張感を維持して中だるみの起きやすい1年生後半から2年生を乗り切れるように指導を工夫することが大切です。また、入学当初から進学に対する意欲を高めていくことも重要です。本校では、1年生で学部研究をさせたり、大学のオープンキャンパスに参加させたり、進路について考える機会を多く設けています。模試の結果も重視し、校内では順位が高くても全国的に見ればまだまだであることを生徒に意識させ、入試に向けた意識の醸成を図っています。

ただし、限られた時間で学力を高めるには、授業を通していかに各教科の面白さや醍醐味を伝えるかが最も重要だと思います。授業の「進度」と「深度」を推し量り、学年・教科間の共通理解の下にカリキュラムをつくることが重要なポイントになると思います。

川村　先を見通した指導も、重要になるのではないでしょうか。本校では国数英の3教科で、2週間先までの授業内容や宿題、小テストの範囲などを示した短期的な教科シラバスを作成中です。生徒の学習時間も記録させることで、例えば今週は部活動の大会があるから早めに宿題に取り組もうというように、自分でスケジュール管理をしながら自学自習に取り組めるようになってほしいと期待しています。

伊東　私は、新課程を本校の授業を

見直すチャンスと捉えています。授業時間が足りなければ、限られた時間の中でどうすれば良いのか、もっと工夫できる点はないのか。それぞれの先生が自分の授業を見つめ直し、改善していく努力が必要です。また、それぞれの授業から出てきたノウハウを校内で共有・蓄積すれば、自ずと学校全体の教育力も上がっていくのではないでしょうか。

限られた時間の中で授業の質を高める

編集部　限られた時間の中で、授業の質を高めていくためにはどのような工夫が必要でしょうか。

伊藤喬　学習指導要領を精査して、授業内容を見直すことから始めてはどうでしょうか。新課程では理科の内容が大きく変わります。変わる部分と変わらない部分を吟味し、基礎科目と基礎を付さない科目のつながりを見て、ここは2年生以降に教えた方が理解が深まるから、1年生では省略しようというように、内容を精選することでより効率的な授業が出来ると思います。同時に、いろいろな話題や教材を教室に持ち込み、生徒の興味を喚起することも忘れてはなりません。教科の魅力を伝えることによって、教科の学習意欲が喚起され、深い考察も可能になると思います。

伊藤秀　英語の場合、異なる科目で内容が重なる部分があります。3年間を見通してこれらを有機的に結び付けていくことで、時間を短縮しながら同時に英語力も高めていけると思います。また、中学校との接続を踏まえると、高校入学後、いきなり文法の学習から始めるのではなく、アウトプット中心の授業をし、徐々に文法の解説を増やすという展開も考えられるでしょう。

川村　私は黒板にチョークで板書するという固定観念を改め、本年度からプレゼンテーションソフトを使った授業を試みています。視覚的に分かりやすく、ポイントを押さえることによって、指導の効率化を図っています。1回の授業で2分でも3分でも時間の短縮を試みれば、1年間で1単位くらいは捻出でき、他の指導に活用できると考えています。

学力に合った方法で知的好奇心を刺激する

編集部　学力層の拡大への対応も難しくなるのではないでしょうか。

伊東　私は「習熟度」が鍵になると思います。習熟度別に分けることも一つの方法ですが、一つの教室に偏差値40から70までの生徒が混在している中で一人の教師が教えなければならない場合、それぞれの学力層に応じた話題を提供する方法が有効だと思います。実際、授業の最後に東京大レベルの問題を投げかけ、成績上位層の知的好奇心をくすぐるということもしています。

後藤　生徒同士が相談したり、学び合ったりしながら答えを導き出すような発問も有効だと思います。本校には、優秀な生徒を見て自分も頑張ろうと発奮する生徒が大勢います。多少時間をかけてでも、成績上位層に積極的に発表させることで、中・下位層の生徒の意欲を高められるのではないかと思っています。また、出来る生徒の考え方や解き方を参考にして、自身の国語力を高める生徒も増えてくると思います。

川村　教える内容が増えるからといって、単にシステムを変えたり、授業時間を増やしたりするだけでは、我々教師の成長はありません。与えられた条件の中で不断の改善を試みることで、指導の方向性や新しい学校の形が見えてくるのではないでしょうか。

編集部　本日はありがとうございました。

1年次のカリキュラム策定の視点

- 理科の履修を工夫し、文理選択を判断しやすくする
- 国数英の基礎学力を重視する
- 英語はアウトプット中心の授業から始める
- 学び合いの授業を重視し、学力層拡大に対応

岩手県立
福岡高校

成績層別指導

成績層別指導を徹底し生徒の力を引き出して全校的に学力を上げる

◎「文武両道」「質実剛健」を校是とする。2005年度に教育改革「ダッシュ70プラン」に着手。08年度には「いわて進学支援ネットワーク事業」に指定され、県内4校と連携して学力向上に取り組む。甲子園出場10回の野球部をはじめ、10年度インターハイ出場の陸上部や弓道部など部活動も活発。

設立
1901（明治34）年

形態
全日制・定時制／普通科／共学

生徒数
1学年約190人

10年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、小樽商科大、北海道大、北海道教育大、弘前大、岩手大、東北大、秋田大、千葉大、東京学芸大、京都大、釧路公立大、名寄市立大、岩手県立大などに92人が合格。私立大は、盛岡大、東北福祉大、北里大、慶應義塾大、東洋大、法政大など延べ67人が合格。

住所
〒028-6101 岩手県二戸市福岡字上平10

電話
0195-23-3385

Web Site
http://www2.iwate-ed.jp/fuk-h/

変革のステップ

背景
◎学校として統一した指導方針がなく、教師の足並みがそろわなかった。生徒の力を伸ばし切れていないという地域の声もあった
STEP 1

実践
◎公開授業などで授業力を高め、学力に応じたきめ細かな指導を行う。他校との連携により教師・生徒双方の意識を高める
STEP 2

成果
◎学力面では過去最高の進学実績を挙げる。ノウハウを共有・継承しようという教師の意識も向上
STEP 3

県内屈指の伝統校として地域の期待を背負う

2010年3月、岩手県立福岡高校では、国公立大に過去10年で最高となる92人が合格した。70人前後で推移していた過去3年間の実績を20人以上も上回る躍進であった。佐々木龍孝校長は、次のように評価する。

「統一した指導方針の下、先生方が一致団結した結果です」

5年前、同校を取り巻く状況は厳しかった。旧制中学校を前身として100年以上の歴史を持つ伝統校であるだけに、同校に寄せられる地域の期待は大きい。しかし、国公立大合格者は毎年50～60人にとどまり、生徒を伸ばし切れていないのではないかという声が聞かれた。

校内にも課題を抱えていた。学年団の独立性が強く、良い取り組みがあってもなかなか継承されなかった。ノウハウが蓄積されにくいので、進学実績は年ごとにぶれが生じる。組織的に生徒の力を伸ばしていく必要があった。

生徒の人間力育成を目指す「ダッシュ70プラン」

こうした課題を背景として、05年度に策定したのが「ダッシュ70プラン」であった。「よい学校」「よい人生」「よい教師」をキーフレーズ

に、生徒の学力・人間力を高め、一人ひとりの進路実現を目指す改革プランである。具体的には、国公立大合格者数70人を目標に、生徒の学力・進路意識の向上と教師の指導力向上を図る。

柱の一つは、「よい教師」を目指した授業力の向上だ。生徒による授業評価を実施し、教師の方針と生徒の意識とのずれを明らかにして、授業改善に結び付けた。生物担当で教務主任の三戸望先生は、自分の授業を客観的に見られるようになったと話す。

「私は授業でプレゼンテーションソフトを使い、分かりやすく視覚的に伝えるように心掛けていたのですが、生徒からは『板書の方が良い』という声が多く挙がりました。授業評価と同じ項目で自己評価も行うのですが、生徒の評価とギャップのある項目もあり、自分の授業を改めて見直すことが出来ました」

もちろん、無条件に生徒の意見を取り入れるわけではない。国語担当の小野拓先生は次のように話す。

「生徒から『進度が速い』という指摘をよく受けます。ゆっくり進めた方が生徒の評価は上がるかもしれませんが、それで必ずしも生徒の学力が上がるわけではありません。本当に生徒のためになる授業とは何かを考えながら、授業評価を活用したいと思います」

岩手県立福岡高校校長
佐々木龍孝 Sasaki Ryuko
教職歴35年。同校に赴任して1年目。「努力の継続」

岩手県立福岡高校
三戸 望 Mito Nozomi
教職歴26年。同校に赴任して4年目。教務主任。「生徒にとって良いと思われることを優先する」

岩手県立福岡高校
木村 基 Kimura Motoi
教職歴23年。同校に赴任して5年目。進路指導主事。「巧遅は拙速に如かず」

岩手県立福岡高校
小野 拓 Ono Hiraku
教職歴15年。同校に赴任して4年目。進路指導課。「信賞必罰」

「授業展開シート」で指導ノウハウを共有

授業公開も積極的に行う。自由に授業を見合う「互見授業」、5月に保護者や地域の人たちに授業を公開する「学校に行こう週間」などである。数学担当で進路指導主事の木村基先生は、互見授業の効果を次のように話す。

「例えば、担当教科の数学が苦手な生徒でも、他教科の授業では生き生きしている様子が見られたりします。生徒を多面的に理解して指導に生かすことが出来るのです」

しかし、業務の合間に他の教師の授業を見る時間を確保することは簡単ではない。また、1回の授業で得られる情報にも限度がある。そこで、すべての教師が「授業展開シート」を作成し、生徒・教師に公表している（P.18図）。授業の進め方、学習上のポイントについて、A4の用紙に記した指導計画である。年度初めにすべての授業で生徒に配付する。

シートは共有サーバーにアップされ、教師は自由に見ることが出来る。他の教師がどのように課題を出しているのか、どのようなテストを課しているのかということは、授業を見ただけでは分からない。実績を上げている教師のシートを参考に、授業を改善する教師も多いという。

「トップ10サク」で成績上位層の学力・意欲を向上

二つめの柱である生徒の学力向上については、授業以外でも学力層に応じたきめ細かい指導を行う。

成績上位層には、1年生から「トップ10サク」を実施する。国数英それぞれにおいて、定期考査や模試の成績による上位20人前後に対して、週1回の添削指導を行う。3教科すべての指導を受ける生徒もいれば、1教科のみという生徒もいる。得意教科の指導を受けて自信を深め、他教科が伸びる生徒も多いという。伸びしろの

大きい1年生の段階から、生徒の可能性を出来るだけ広げることが大切というわけだ。

添削後は、教科ごとに週1回、昼休みに解説も行う。

「単に添削をするだけでなく、生徒が顔をそろえることで、『みんなで頑張ろう』という仲間意識、良い意味での競争意識を芽生えさせようとしています」（木村先生）

「上位層は意図的につくるもの」と考え、成績が下がっても入れ替えはせず、進級時に成績が上がった生徒を加えていく。以前は、生徒の意欲を重視し、希望制としていた学年もあったが、生徒の学力が伴わず、普段の授業がおろそかになることもあった。そこで、07年度の1年生からは成績を基に教師が選抜し、参加する意思を確認した上で決めている。

09年度と10年度には、上位層から更に上位の生徒を選抜する「超トップ10サク」も行った。東京大などの超難関大を目指す生徒に対して、別メニューの添削指導を行うと共に、同窓会から支援を受けて、模試や教材、3年生4月に行う東京大見学、1週間にわたる東京の予備校での夏期講習などの費用を援助した。

図　授業展開シート

平成２２年度　**授業展開シート**

担当者	
科　目	数学Ⅲ・C

【私の授業の進め方】

① 前の時間に学んだ内容の**確認テスト（５分程度）**を度々行います。隣同士で交換して採点し解けなかった人は解答用紙の裏に**１０回解いて**その日のうちに出してもらいます。

② 授業は**「予習プリント」**を用いて行います。あらかじめ指示された問題等を、教科書などを参考にしながら**自分の力で考え解いてきてください。**ただし、予習の段階で分からないことも当然出てくると思いますので、例題や例は授業の中で丁寧に解説します。

③ 「予習プリント」の中の問や練習は、授業の中で実際に解いてもらいます。プリント以外の問題も補充して演習することもあります。

④ この時間に学んだことをまとめ、次の時間に学ぶ内容に言及しながら、予習してくる問題を指示します。

⑤ その日学んだ内容の復習は「日々の演習」（通称「日々演」）で行います。

【学習上のポイント・自分でやるべきこと】

① 予習について（３０分）
解ける人はどんどん先の問題を解いてきてください。自分の予習した内容を授業で確認するのが理想的な学習スタイルです。逆によく理解できなかった人も、どんなことを学ぶのかを一通り目を通しておくだけで、授業の理解は全く違うはずです。

② 復習について（３０分）
その日学んだ内容の復習が効果的にできるように、授業の進度とあわせてプリントを毎日出します。これが**「日々の演習」（通称「日々演」）**です。**毎日配布しますので、家に持ち帰りしっかりと解き、翌朝に登校したら次の日々演の裏の解答で答え合わせをして、提出します。**数学学習係はみんなに声をかけて回収し、昼休み中に教科担任までもってきてください。

③ 「まとめプリント」について
単元が終わったら、その単元の中で基本的な問題や重要な問題を厳選した「まとめプリント」を配布し、授業の中で５時間程度演習していきます。予習する問題と復習する問題に分かれていますので、詳しくは配布したときに説明します。

④ テストについて
まとめプリントを演習後、その単元の小テストを行います。

最後に、数学の学習で心がけてほしいのは、**図をかくこと、具体化すること、うまい解答をまねること**の３つです。これは**「手を動かすこと」**といってもいいでしょう。そうすればいつの間にか**数学の問題が解けるようになり、数学が好きになるはず**です。

がんばれ福高生！！

すべての教師が毎年、最初の授業で生徒に配付する。構成は自由だが、「授業の進め方」「学習上のポイント」は共通項目とした

＊学校資料をそのまま掲載

他校と切磋琢磨しながら地域全体で生徒を育てる

もう一つ、成績上位層を伸ばす上で効果を上げている取り組みは、他校との連携事業である。

同校は、08年度に県教委指定の「いわて進学支援ネットワーク事業」に選定された。学校のネットワークを活用して各校の学力を相乗的に高め、医師や弁護士、研究者・技術者など、将来の岩手県を支え、地域づくりや産業振興を担う人材の育成を目指す事業である。福岡高校は大船渡、釜石、宮古、久慈の各高校と共に「県北・沿岸地域」グループを形成し、共同で進学講演会や難関大対策学習会、学習合宿などを実施している。

「本校には、難関大を狙う生徒がそれほど多くなく、予算も少ないため、学校単独で外部講師を招くのは容易ではありません。また、この地域には塾もなく、外部からの情報もほとんどないため、他校の生徒との学習会や学習合宿による刺激から、生徒により高い志望を目指そうとする意欲を喚起したいと考えました」（木村先生）

連携事業は各校の教師にとっても大きな刺激となっている。他校と合同で研修を行ったり、情報交換したりする中で、他校には負けられないという競争心が芽生え、切磋琢磨しながら地域全体で生徒の学力を高めようという機運が生まれている。10年度入試において同校から京都大合格者が輩出した時には、他校の教師は自分の学校のことのように喜んでくれたという。

朝7時半からの補習で成績下位層も徹底フォロー

10年度入試での躍進の背景には、成績下位層の伸びも大きかった。特にこの学年は、高校入試で長らく行われていなかった推薦入試が復活したこともあり、入学時、学力に困難を抱える

生徒が多かった。

推薦入学者は全体の1割である約20人だが、主に部活動の実績を評価されて合格しており、基礎学力が未定着で、一般入試では高校合格は難しかったと思われる生徒もいた。そこで、定期考査ごとに下位層に補習を行い、それでも学力が定着しない生徒には、11月から3か月間、毎朝7時半から30分間の特別補習を実施。簡単な英単語も書けない生徒に対して、漢字や英単語の書き写し、因数分解やルートの計算問題など、中学段階の課題に繰り返し取り組ませた。

書いては忘れ、忘れては書きの繰り返しであったが、教師は持ち回りで毎日、粘り強く指導を続けた。当初は、3か月もの長期補習に生徒は耐えられないのではないかという懸念もあった。ところが、実際には脱落者はおろか遅刻する生徒すらいなかった。生徒は今まで味わったことのない達成感を得た様子で、「初めて90点が取れた」「初めて勉強で先生に手を掛けてもらった」とうれしそうに話していたという。

「成績下位層への徹底した指導は『社会に出た時に必要となる力を高校で付けさせたい』という学校からのメッセージです。この補習以後、下位層の生徒にも私たちの指導や方針が浸透し、学年全体の結束が強くなりました。希望進路は違っても、学年全体で頑張ろうという雰囲気が、生徒にも教師にも生まれたのです。また、補習を受けた生徒の中には、就職志望から大学進学を決意した者もいました。私たちの粘り強い指導が生徒の学ぶ意欲を呼び起こすことが出来たのだと思うと、感無量でした」（小野先生）

英語力の強化を目指す「Eダッシュプラン」も始動

「ダッシュ70プラン」が始まって5年。改革の成果は合格実績だけではない。最も大きく変わったのは、教師の意識だ。かつては学年色が強く、他学年の真似は絶対にしないという教師もいたが、今では自分の学年のことだけを考えるのではなく、学校全体でノウハウを共有・継承していこうという雰囲気がある。

そうした変化は、新しい取り組みに対する教師のフットワークの軽さにもつながっている。

10年度は佐々木校長のリーダーシップの下、英語力の強化を目指す「Eダッシュプラン」を立ち上げた。この地域は、子どもが少なく学校規模が小さいこともあり、中学校の英語は専任の英語担当者以外の教師が指導することもある。地域の恒常的な課題として、英語力向上があったのだ。そこで、同校は英語の授業を、これまでの和訳中心の方法から、アウトプットやコミュニケーションを重視した授業とし、大学入試にも対応できる実践的な英語力を身に付けさせる方針を打ち出した。10年度2学期に、コミュニカティブな授業への切り替えを図ったところ、生徒の反応も上々で、教師も手応えを感じ始めているという。

「『ダッシュ70プラン』で進学実績が上がり、国公立大合格者数70人という目標も大幅に上回ることが出来ました。今後はこの勢いを継承しつつ、英語力の強化に向けた改革を進めていきます。多くの場合、教師にとって授業の方法を根本的に変えるのは、抵抗を感じるものです。しかし、英語科の先生方は『Eダッシュプラン』に積極的に取り組み、授業改革を進めています。『ダッシュ70プラン』を通して、新しいことに挑戦する土壌が出来たことによって、更に大きな飛躍をするための一歩を踏み出させたのだと思います」（佐々木校長）

現在、数学の強化を目指す「Mダッシュプラン」も構想中だ。生徒の変化、目に見える実績の向上が、教師の改革意欲を後押ししている。

「生徒は手を掛ければ掛けただけ大きく成長します。教師は、学力やスポーツでまだ発揮されていない、生徒の潜在能力を引き出す必要があります。教師にとってはやりがいの大きな学校だと思いますし、本校が頑張らなければ地域の発展はありません。眠っている生徒の力を引き出せるよう、これからも不断の指導改善を心掛けていきたいと思います」（三戸先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2010年4月号指導変革の軌跡「**静岡県立伊東高校**」など
▶▶▶ ***http://benesse.jp/berd/*** → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）

東京都・私立
豊島岡女子学園中学・高校

進学実績の向上

授業力を向上し 教師への信頼感を高め 金レベルの生徒に育てる

◎旧加賀藩士夫人の河村常など4人の女性が設立した女子裁縫専門学校が前身。「道義実践」「勤勉努力」「一能専念」を教育方針として、道義、優しさ、思いやりの心を育む。授業前5分間の運針は、裁縫学校以来の伝統的な取り組み。和室・洋室での礼法授業など、しつけ教育にも力を入れる。

設立
1892(明治25)年

形態
全日制／普通科／女子

生徒数
1学年約320人

10年度入試合格実績(現浪計)
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、お茶の水女子大、東京大、東京学芸大、東京工業大、一橋大、名古屋大、京都大などに146人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ1273人が合格。

住所
〒170-0013 東京都豊島区東池袋1-25-22

電話
03-3983-8261

Web Site
http://www.toshimagaoka.ed.jp/

変革のステップ

背景
◎1990年代初頭、進学校へと脱皮を遂げるが、第1志望の入学者が少なく、意識が低い生徒が多かった
STEP 1

実践
◎授業の質の向上、教師の指導力向上、「進学通信」やクラブ活動の奨励などにより、学校への帰属意識を高める
STEP 2

成果
◎何事にも一生懸命取り組む生徒が増え、国公立大合格者数が安定的に100人を超えるようになる
STEP 3

生徒を「金レベル」に引き上げたい

豊島岡女子学園中学・高校は、東京・池袋に立地する私立の進学校だ。例年100人以上が国公立大に合格し、東京大にも約20人が進学する。

1990年代初めまでは短大進学や就職が主な進路先だった同校が、進学校へと舵を切り始めたのは80年代終わりのことだった。まず、89年度に、中学校入試日程を2月1日から2日へ移動させた。トップ校と重ならないように試験日を1日ずらすことによって、その併願先として学力の高い生徒を受け入れようと考えたのである。狙いは的中し、96年度入試で初めて東京大に5人が合格。98年頃には理系志望の生徒が増え始め、一定数が難関大に合格するようになった。

しかし、当時の生徒の意識を、総合企画部進路指導主任の十九浦(つづうら)理孝先生は次のように振り返る。

「当時は、本校に入学しても『本当はA高校に行きたかった』という気持ちを引きずったままで、学校に顔が向いていない生徒が存在していました。難関大の合格者数が増えたといっても、そうした生徒の意識を学校に向けさせ、勉強やクラブ活動、毎日の生活も含めて頑張れる『金レベル』まで引き上げたい。そして、最後は『豊島岡女子学園でよかった』

といって卒業してもらえる学校にしたいというのが、私たちの思いでした」

大胆な組織改編により進路の発信力を強化

転機は2003年に訪れた。元國學院大教授の二木謙一校長が赴任し、大規模な組織改編が行われた。それまでは、校長・教頭の下に各学年、各校務分掌が横並びの関係にあった。横並びとはいっても、学年運営は学年主任に任され、学年によって指導のぶれがあった。

「その頃、私は10年ほど続けて3年生の担任を任されていました。長年3年生を見ていると、学年ごとに指導のぶれがあることが分かります。表面的な学習に終始してきた学年は、受験が佳境に入るとプレッシャーに耐えきれず逃げ出す生徒が多くなることがありました。最後まで粘り強く頑張って結果を出す学年もありましたが、学年ごとに指導方針や実績がぶれていては、生徒の信頼は得られません。豊島岡女子学園に来てよかったと思われるためにも、学年を超えて教師が意思疎通を図れる体制を整える必要がありました」（十九浦先生）

二木校長は、教務部の下に学年と教科、新設した総合企画部の下に進路、生徒会、学園生活などを置き、部署の主任は全員が同等な関係となる組織をつくり上げた。結果として、学校として統一した指導を行えるようにシフトしていった。

部署間の意思疎通は、それぞれ週1回開催される、総合企画会議、教科主任会議、学年主任会議で図っている。会議には、各部署のメンバーのほか、校長、教頭、教務部長、総合企画部長、進路主任などが出席し、それぞれの部署における課題の共有や方針の策定が行われる。

「以前は新しい企画を提案したいと思っても、どうすればよいか分かりませんでした。今は提案する場が確保されているので、若手教師も意見を出しやすくなりました」（十九浦先生）

豊島岡女子学園中学・高校
十九浦理孝 Tsuzuura Masataka
教職歴13年。同校に赴任して14年目。総合企画部進路指導主任。「努力は絶対に裏切らない」

豊島岡女子学園中学・高校
菱沼洋介 Hishinuma Yosuke
教職歴10年。同校に赴任して11年目。教務部教務計画主任。「生徒の良いところを出来るだけ引き出したい」

豊島岡女子学園中学・高校
中嶋 淳 Nakashima Jun
教職歴6年。同校に赴任して7年目。総合企画部進路進学副主任。「どのような環境下でも、何に対しても全力で挑戦し続けたい」

「進学通信」で教師の思いを伝え挑戦し続ける心を養う

03年度に進路指導主任に就任した十九浦先生は、新体制の利点を生かし、学年間のぶれをなくすことに努めた。まず、学年によって異なっていた模試を整理し、生徒に配布する進路情報誌や渡すタイミングも統一。05年度には全学年に向けて、週1回の「進学通信」（P.22図）を発行し始めた。

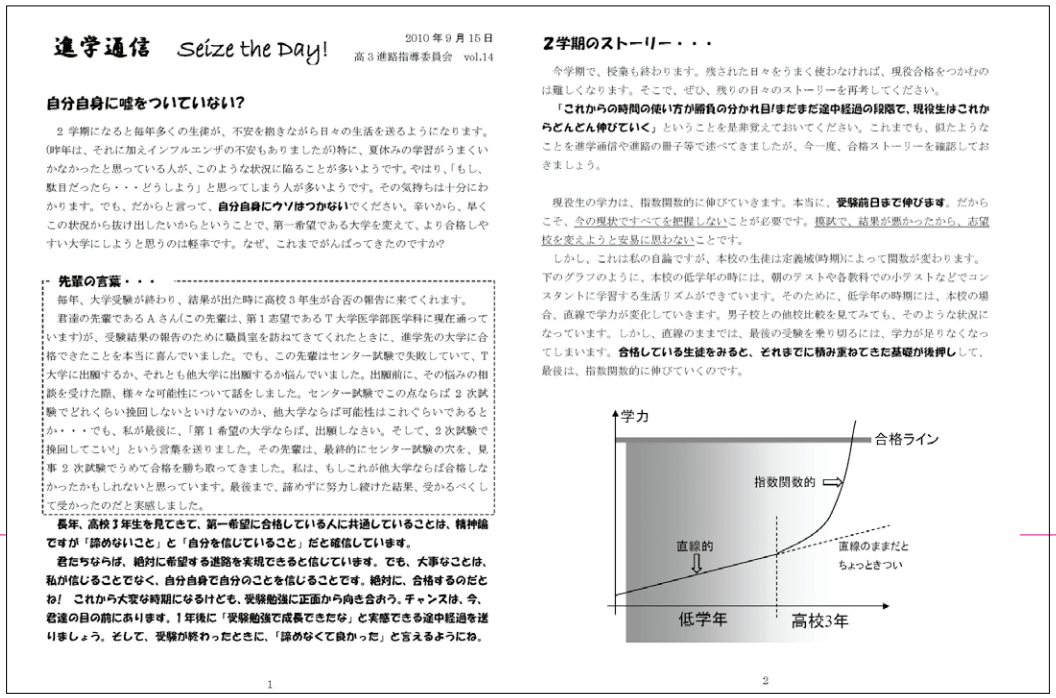
「学校全体として進路指導を推進していくために、教師の意思統一は不可欠です。生徒全員が最後まで挑戦し続けられるよう、『進学通信』に模試の結果や主要大学への出願者数などのデータを載せ、更に生徒に伝えたい言葉を書きました。『何事にも逃げずに挑戦し続けた先輩を見習って』『我々が出来ることは、辛くても頑張っている君たちを応援することだけ』など、一つひとつの文言に『金レベル』の生徒になってほしいという私たち教師の思いが込められています」（十九浦先生）

成績下位層の底上げをしつつ上位層にも刺激を与える

「進学通信」で生徒の意識付けを図る一方、何よりも重視したのは授業の充実だ。

「生徒の顔を学校に向けるために大切なの

図　「進学通信」



進学通信　Seize the Day!

2010年9月15日
高3進路指導委員会　vol.14

自分自身に嘘をついていない?

2学期になると毎年多くの生徒が、不安を抱きながら日々の生活を送るようになります。(昨年は、それに加えインフルエンザの不安もありましたが)特に、夏休みの学習がうまくいかなかったと思っている人が、このような状況に陥ることが多いようです。やはり、「もし、駄目だったら・・・どうしよう」と思ってしまう人が多いようです。その気持ちは十分にわかります。でも、だからと言って、**自分自身にウソはつかない**でください。幸いから、早くこの状況から抜け出したいからということで、第一希望である大学を変えて、より合格しやすい大学にしようと思うのは軽率です。なぜ、これまでがんばってきたのですか?

先輩の言葉・・・

毎年、大学受験が終わり、結果が出た時に高校3年生が合否の報告に来てくれます。
君達の先輩であるAさん(この先輩は、第1志望であるT大学医学部医学科に現在通っていますが)が、受験結果の報告のために職員室を訪ねてきてくれたときに、進学先の大学に合格できたことを本当に喜んでいました。でも、この先輩はセンター試験で失敗していて、T大学に出願するか、それとも他大学に出願するか悩んでいました。出願前に、その悩みの相談を受けた際、様々な可能性について話をしました。センター試験でこの点ならば2次試験でどれくらい挽回しないといけないのか、他大学ならば可能性はこれぐらいであるとか・・・でも、私が最後に、「第1希望の大学ならば、出願しなさい。そして、2次試験で挽回してこい!」という言葉を送りました。その先輩は、最終的にセンター試験の穴を、見事2次試験でうめて合格を勝ち取ってきました。私は、もしこれが他大学ならば合格しなかったかもしれないと思っています。最後まで、諦めずに努力し続けた結果、受かるべくして受かったのだと実感しました。

長年、高校3年生を見てきて、第一希望に合格している人に共通していることは、精神論ですが「諦めないこと」と「自分を信じていること」だと確信しています。

君たちならば、絶対に希望する進路を実現できると信じています。でも、大事なことは、私が信じることでなく、自分自身で自分のことを信じることです。絶対に、合格するのだとね!　これから大変な時期になるけども、受験勉強に正面から向き合おう。チャンスは、今、君達の目の前にあります。1年後に「受験勉強で成長できたな」と実感できる途中経過を送りましょう。そして、受験が終わったときに、「諦めなくて良かった」と言えるようにね。

1

2学期のストーリー・・・

今学期で、授業も終わります。残された日々をうまく使わなければ、現役合格をつかむのは難しくなります。そこで、ぜひ、残りの日々のストーリーを再考してください。

「これからの時間の使い方が勝負の分かれ目!まだまだ途中経過の段階で、現役生はこれからどんどん伸びていく」ということを是非覚えておいてください。これまでも、似たようなことを進学通信や進路の冊子等で述べてきましたが、今一度、合格ストーリーを確認しておきましょう。

現役生の学力は、指数関数的に伸びていきます。本当に、**受験前日まで伸びます**。だからこそ、今の現状ですべてを把握しないことが必要です。模試で、結果が悪かったから、志望校を変えようと安易に思わないことです。

しかし、これは私の自論ですが、本校の生徒は定義域(時期)によって関数が変わります。下のグラフのように、本校の低学年の時には、朝のテストや各教科での小テストなどでコンスタントに学習する生活リズムができています。そのために、低学年の時期には、本校の場合、直線で学力が変化していきます。男子校との他校比較を見てみても、そのような状況になっています。しかし、直線のままでは、最後の受験を乗り切るには、学力が足りなくなってしまいます。**合格している生徒をみると、それまでに積み重ねてきた基礎が後押し**して、最後は、指数関数的に伸びていくのです。

2

「進学通信」は学年の進路担当が執筆。この号は全6ページで、3年生の受験に向けての2学期の過ごし方、気の持ちようを伝え、模試やセンター試験の日程も掲載した。担任にも読んでもらい、教師間の意思疎通を図ることも狙いの一つだ　＊学校資料をそのまま掲載

中学1、2年生では成績下位層をつくらないことを徹底する。例えば、漢字や英単語、計算などの小テストを週1回行っているが、不合格だった生徒には追試を行う。その追試が不合格なら再追試として、合格するまでとことん追いかける。

「これらのテストは努力をすれば必ず出来る内容です。逃げずに努力し続ける習慣を低学年時から身に付けさせるためにしつこいと思われても追試を受けさせます」(十九浦先生)

成績下位層にはこのように個別対応を行うが、授業では上位層の意欲を刺激するよう心掛けている。物理担当の中嶋淳先生は、単に現象を説明するだけではなく、数学と関連付けた説明で生徒の関心を喚起する。

「上位層は数学や化学への関心が高い生徒も多く、その知識と関連付けて説明すると、より深く原理を理解させることが出来ます。難関大の入試問題も、背景にはそのような数学的な原理がかかわることが多くあります。授業でそうした考察を伝えることで、受験時にじわりと効くことを期待しています」

英語の得意な生徒には法則名の英訳を教えるとすんなり理解することがあるなど、得意教科からアプローチして理解を深めさせることもあるという。

授業見学と研究授業で教師の授業の質を高める

教師の授業力向上は、授業見学と研究授業を柱に進めた。授業見学は、非常勤講師も含め全教師が年1回、特定の日を決めて普段の授業を見る。見学した教師は授業後、簡単な報告書を授業者に提出し、個別に意見交換を行う。

研究授業は、年1回、教科の代表者1人が事前に作成した指導案の下で行う。同一教科の教師は原則全員が見学する。代表者の決め方は教科によってさまざまで、年齢順の場合もあれば、指名により特定の若手教師が代表となる場合もある。授業後の意見交換では、良かった点、改善すべき点を率直に話し合う。「全く駄目」という厳しい意見が出ることもあるという。

授業のよしあしは「生徒を見ているかどうかにある」と十九浦先生は強調する。

は、何といってもしっかり授業をすることです。『この先生についていけば安心』という信頼感があるからこそ、生徒は最後まで粘り強く頑張れるのです」(十九浦先生)

「教科の専門知識はあって当然。真の授業力は『生徒をしっかり見る』『適切な表現力を身に付ける』の二つに尽きると思います。そして、授業では教え込まないことが重要です。答えをすぐに教えるのではなく、関心を高めたり考えさせたりすることで、生徒の力は更に引き出されるのです」

東京大の入試問題はその日のうちに解答を作る

近年は入試問題研究にも力を入れており、特に、センター試験や東京大をはじめとする国立大の個別学力試験の問題は、公表される端から解いていくという。数学担当の菱沼洋介先生はその狙いを次のように話す。

「入試問題は公表されたものから、すぐに解いていきます。特に、東京大は翌日までに必ず解いておきます。実際に解いているからこそ、アプローチに手間取った箇所なども分かり、それを伝えることで生徒も信頼してくれるのだと思います」

更に、教科を超えて十数人の教師が集まり、自分の入試分析の結果を公表することもある。

「担当教科だけでなく、他教科の情報を知っていればこそ、担任としての信頼感も高まるのです」（十九浦先生）

こうした取り組みを生徒の目に触れるところで行うこともあった。「先生たちも勉強している」「自分たちのために頑張ってくれている」という生徒の思いが、教師や学校に対する信頼感を育むのである。

クラブ活動の活性化で学校全体が明るく元気に

勉強以外の場面で、生徒に力を発揮させることも、同校は重視している。その鍵となるのがクラブ活動だ。クラブ活動は3年生まで原則全員が加入し、引退はなく卒業するまで「部員」である。

数年前からは、文化部を中心に活動の成果を披露する場を設けている。花道部は週替わりで玄関に花を生け、コーラス部と吹奏楽部の演奏による校歌のCDも出された。漫画イラスト部が作った学校案内は、校内で販売されている。

「発表の場があることで、生徒はより積極的にクラブ活動に取り組むようになりました。多くの生徒に発表の場が与えられることで学校全体が明るくなった気がします」（中嶋先生）

ここ十数年の改革が実り、同校では進学実績が躍進し続けている。毎年、国公立大合格者は100人以上、早慶上智の合格者は300人を超えている。08年度入試では12人だった東京大合格者は、10年度には24人に倍増した。

「何よりもうれしい変化は、生徒が勉強以外のことにも前向きに取り組むようになったことです。勉強で自信を付けた分、クラブ活動でも頑張れるようです。まさに勉強とクラブ活動は両輪だと実感しています」（十九浦先生）

まさに「金レベル」の生徒が育ちつつある。更に教師も変わった。若手教師も活発にアイデアを出し、それが学校全体に活気を与えている。菱沼先生は学校の様子を次のように話す。

「職員室には教師がざっくばらんに話し合える雰囲気があります。アイデアを出し動き始めるまでのスピードも速くなりました。教師一人ひとりが個性を発揮できる場が、ここにはあるのです」

課題は、より深い洞察力、課題解決力を持つ生徒を育てることだと十九浦先生は話す。

「進学実績は順調に伸びていますが、第1志望校に入ったものの、目的を見つけられずに悩む生徒がいるのも事実です。何のために大学に行くのか、社会に出て何をしたいのか、教師が与えるのではなく、自分の中から答えを見つけてほしい。そのためには、自分で課題を見つけ、解決できる力を身に付けてほしいと考えています。日本の将来を担う子どもたちを育てているという気概を持って、その力を最大限に発揮できる教育を目指していきたいと思います」

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2010年6月号指導変革の軌跡「東京都・私立吉祥女子中学・高校」など
▶▶▶ http://benesse.jp/berd/ → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）

熊本県立
高森高校

チーム・ティーチング

英語・体育、国語・日本史 異教科連携の授業で 生徒の意欲を喚起

◎1948年に熊本県立阿蘇高校高森分校・白水分校として発足（のちに合併）。中庸の三徳「知・仁・勇」を基本的な徳目として、真理の探究と心身の鍛練、友愛の心の涵養を目指す。2006～08年度に文部科学省の学力向上拠点形成事業の指定を受け、授業の質、生徒の学習意欲の向上に向けた改革を進めてきた。

設立
1948（昭和23）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約35人

11年度進路実績（1月末現在）
4年制大の合格者は、佐賀大1人、徳島大1人、熊本県立大2人、熊本学園大1人。短大・専門学校合格者9人、就職内定者15人。

住所
〒869-1602
熊本県阿蘇郡高森町高森1557

電話
0967-62-0185

Web Site
http://www.higo.ed.jp/sh/takamorish/

変革のステップ

背景
◎生徒指導上の課題や慢性的な定員割れに加え、生徒の授業に対する意欲や理解度も低かった
STEP 1

実践
◎授業研究の中心的な取り組みとして、異なる教科の教師によるチーム・ティーチングを取り入れる
STEP 2

成果
◎授業に対する生徒の集中力、理解度、定着度が増す。教科間のつながりを意識する生徒も出てきた
STEP 3

生徒の現状に合っていなかった授業

漢文の授業で、英語の教師が英文法の構造を説明する。英語の授業に体育の教師が入り、英文のテーマであるジャンクフードについて保健体育の視点から解説を加える――。

熊本県立高森高校では、異なる教科の教師2人によるチーム・ティーチング（TT）を、2006年度から研究授業などで行っている。導入のきっかけは、同年に指定を受けた文部科学省の「学力向上拠点形成事業」だ。現在では遅刻はほぼなく、基本的生活習慣は定着しているが、当時は生徒指導が大きな課題だった。「地域に根ざした活力ある学校」をスローガンに、服装指導や登校指導の徹底、学校行事や部活動などの充実を図り、学校改革を推進した。

07年度に赴任した教務主任の古閑（こが）博昭先生は、赴任当初の様子を次のように振り返る。

「悪ぶっている生徒でも、一人ひとりと接してみると活発で素直な生徒たちでした。当時は生徒と教師の距離が近すぎるために慣れ合ってしまうことが課題で、教師の側が『悪いことは悪い』と明確に言える体制づくりが求められていました」

生徒の学力と授業のレベルが合っていなかったことも課題だった。事業指定時に生徒にアンケートを取ったところ、授業中に私語や居眠り

をする生徒、授業がつまらない、分からないと感じる生徒が、半数以上いることが判明した。

「本校には小・中学校時代に学習に興味を持つ機会を得られないまま高校生になった生徒が多くいます。まずは学びや授業に目を向けさせることが重要でした」（田中一則校長）

テーマは「ジャンクフード」英語と保健体育のTTが実現

TTを導入した当初の狙いは、複数の教師が授業に入ることによって、落ち着いて授業を受けられる環境にすることであった。そのため、まずは学級担任がT2として入り、生徒の授業への姿勢を徹底的に指導した。

生徒の授業態度は大きく改善し、学校が落ち着きを取り戻しつつあった07年度、研究主任となった古閑先生を中心に、授業研究の更なる活性化が提議された。小規模校の特性を生かして何か出来ないか……。検討の結果、浮上したのが異なる教科によるTTだった。

「本校は担当教師が1人しかいない教科が多く、同一教科にこだわっていたのではTTは出来ません。そこで、内容が関連する部分で他教科の先生に入ってもらえば、生徒の興味・関心を高められるのではないかと考えました。小規模校のデメリットを逆手に取ったのです」（古閑先生）

07年10月の研究授業週間では、実施した7コマのうち1コマを、異なる教科の教師によるTTとした。ここに同校初、英語と保健体育の教師による異色の授業が実現した。英語の「ジャンクフード」をテーマとした単元の授業で、英語科の村上房親先生が本文の解釈を一通り説明した後、保健体育科の上田晃裕先生がペットボトルを持って登場。成分表示を示しながら「君たちはここまで読んでいますか」と注意を促した。授業を企画した村上先生は次のように話す。

「以前から漠然と他教科の先生と一緒に授業をしたいと考えていました。ジャンクフードが体に良くないということは分かりますが、なぜ悪いのかを科学的に説明することは、英語教師の私には出来ません。専門の先生に深みのある話をしてもらうことで、生徒の関心を授業に向けられるのではないかと思いました。そもそも、生徒にとっては、授業中に教師が入れ替わること自体が新鮮です。50分間、集中力が続かない生徒にとってはメリハリがつきますし、教科横断的な内容のつながり合いを意識しながら授業を聞くことで、理解度や定着度が増したようです」

古文と日本史のつながりから生徒の関心を「敬語」に向ける

07年度3学期の研究授業は、4コマすべてを教科横断型で実施した。そして、08年度に異教科のTTは更なる進化を遂げる。

この年に赴任した国語科の橋本淳先生による古文の授業が、その発端となった。単に生徒の興味を高めるだけでなく、日常生活で使える知識の習得を目指し「敬語」の授業で異教科のTTを取り入れたのだ。同校の生徒は6割が就職希望であり、3年生になると面接対策の一環として敬語を学習する。そこでは基礎的な言い回しも出来ない生徒が多くいた。橋本先生は、日本史の教師に、古典文学で必ず敬語表現が用い

熊本県立高森高校校長
田中一則 Tanaka Kazunori
教職歴35年。同校に赴任して2年目。「すぐやる、必ずやる、出来るまでやる」

熊本県立高森高校
村上房親 Murakami Fusachika
教職歴10年。同校に赴任して4年目。進路指導主事。「失敗を恐れずに突き進んでほしい」

熊本県立高森高校
古閑博昭 Koga Hiroaki
教職歴8年。同校に赴任して4年目。教務主任。「自分で自分の限界をつくるな」

熊本県立高森高校
橋本 淳 Hashimoto Jun
教職歴7年。同校に赴任して3年目。1学年主任。「過猶不及」

られる天皇や上皇がどれほどの力を持っていたのかを、歴史の観点から説明してもらった。

「本校には、狭いコミュニティーの中で育ったために、敬語を使う機会があまりなかった生徒がいます。そこで、学習にあまり関心がない生徒に対しても強い印象が残せる異教科TTで、敬語の授業を行おうと考えました。社会に出たら必ず必要となる敬語の背景を知ることで、その重要性に気付いてほしいと考えたのです」（橋本先生）

目の前にいる生徒の課題を踏まえた授業づくりを行うことで、TTは更に効果が増すのだ。

教師全員で異教科TTの可能性を洗い出す

TTはあくまで研究授業の一環として行われてきたが、10年度、これを同校の特色とする方向性が示された。1学期の研究授業で、橋本先生が以前行った古文と日本史のTTを実施。同年に赴任した山本朝昭教頭がこれを見て興味を持ち、授業力向上の目玉に位置付けた。

教師全員にアンケートを取り、教科横断で出来る内容を抽出し、マトリックス化してTTの「教科相関表」を作成（図）。10月に行った公開授業では、家庭科と数学が連携して食品の廃棄率を考慮した購入量を計算する授業や、保健体育と地理が連携して歴代のオリンピック開催国の歴史や風土を学ぶ授業などを行った。

国語科の橋本先生は英語科の村上先生と組み、文法の授業を行った。現代文、漢文、英文の文法の共通点や相違点を示し、文法の構造を理解させることが目的である。ここでも根底にあるのは、志望理由書や小論文対策、ひいては社会に出てから必要になる日本語力の育成である。

「生徒の志望理由書などを読んでいると、しばしば『私は看護師になるのが夢です』というような文章の『ねじれ』が見られます。正しい文章は『私の夢は看護師になることです』。この間違いに気付くためには主語や述語の概念が必要ですが、文法の構造を理解していない生徒は『ねじれ』という概念すら分かっていません。文章には主語、述語があるという基本的な知識の習得が、本校の生徒にとって切実な課題なのです」（橋本先生）

文法の定着には、村上先生もかねてから課題意識を持っていた。

「生徒の中には『I is is～』と書く者もいます。『てにをは』の概念すらない生徒もいて、これは単に英語力の問題ではないということを痛感していました」

図　チーム・ティーチングのための教科相関表（抜粋）

	国語	地歴・公民	数学	生物・化学	英語	保健体育
国語		敬語（古文）と天皇の地位	学者・寺田寅彦のエッセーを読む	井伏鱒二『山椒魚』とその生態研究	日本語と英語の文構造解析比較（1年・10月）	
地歴・公民	『大鏡』の文面の考察及び平安時代の貴族社会・摂関政治を考える（2年・10月）		為替レートについて（2・3年・11月）	原子爆弾はなぜ落とされたか（ウラン型とプルトニウム型の仕組み）	国際条約の解説と原文の注釈（3年・10月）	スポーツと政治
数学	数学証明の論理と文章展開	ピラミッドと三平方の定理・通潤橋と数学			数字を英語で読む時間	人文字を作るために数字がどう活用できるか
生物・化学	金属イオンの定性分析（化学）と文章理解（国語）による実験（3年・10月）	生態的地位（ニッチ）と地形や気候との関係	酸・塩基の定義と濃度（指数）計算及びpHの定義・求め方と対数の数的処理（2年・11月）		ワトソン・クリックの二重らせん構造に関する論文にふれる（2年・11月）	スキャモンの発育曲線から見たからだの機能の発達（3年・10月）
英語		阿蘇の観光地を英語でガイドする（3年・10月）				英語によるラジオ体操（2年・12月）
保健体育		オリンピック開催都市と歴史・風土・経済の関係について（3年・10月）				
家庭科			食物検定にむけて、食品の質量の比較や食品廃棄率の計算を行う（2年・10月）			

□部分は2010年度実施予定のチーム・ティーチング。TT授業の単位は縦列の教科となる　＊学校資料を基に編集部で作成

双方の教科が抱える課題が合致する部分を取り上げることで、授業の質も教師の意欲も高まり、教科横断の利点が発揮されている。

「英語と国語にはつながりがある」生徒の気付きを促す

10月に行った公開授業では、TTにグループ学習を取り入れた。全体指導でそれぞれの言葉の構造を説明した後、生徒は4～5人のグループになってプリントに取り組み、現代文、漢文、英文の共通点と相違点を話し合った。橋本先生はその狙いを次のように話す。

「現代文、漢文、英文、それぞれの文章の構造の違いに、生徒に自ら気付いてほしいと考え、グループ学習を取り入れました。結果的に生徒から『（漢文と英文の構造は）同じなんだ』という声が上がり、生徒の集中力がぐっと高まる瞬間がありました」

これは、TTをしていた2人の先生が、この授業に手応えを感じた瞬間でもあった。

また、英語科の村上先生が机間巡視を行い、生徒のつまずきを確認していったところ、事前の予想とは違う部分で多くの生徒が勘違いしていることが分かった。村上先生は、グループ学習中にその情報を橋本先生に伝えた。そして、授業後半に説明しようとしていた内容を変え、急きょ、生徒がつまずいていた個所の解説に切り替えることが出来たのである。

TTは、生徒の授業の理解度が深まるだけでなく、内容の定着の観点からも効果的だという。国語の期末考査で、現代文と英文の違い、漢文と英文の相違点・共通点について説明させる問題を出したところ、多くの生徒が正解した。間違えた生徒も、現代文と漢文を逆に捉えていただけで、授業で取り扱った文章が主語、述語、目的語で構成されていることは理解していた。

TT後の生徒への授業アンケートには、「英語と国語は違う教科だと思っていたけれど、つながっている部分もあることが分かった」という感想が寄せられた。TTが、学びの共通性への気付きや多面的なものの見方につながっていることがうかがえる。

教師の指導力向上につながる教科横断型のTT

田中校長は、異なる担当教科によるTTは教師の指導力向上にも役立つのではないかと期待を寄せている。

「本校の教師はほとんどが30代ですが、教師数が少ないために指導力を高める機会にあまり恵まれていませんでした。しかし、世代が同じでも、TTを組み、双方の指導法を肌で感じることで、指導力は向上できると考えています。教科横断的な知識を身に付けることは、普段の授業をする際の指導の幅にもつながるでしょう。文系・理系の枠にとらわれない、思いもよらない組み合わせの授業から、教科の魅力を再発見してほしいと思っています。生徒と教師双方の潜在的な能力を引き出す可能性を、異教科のTTは秘めていると思います」

生徒の学習意欲の喚起、学力の定着度に一定の効果を上げている異教科のTTだが、指導案の作成や教師間の打ち合わせ、教材作成など事前の準備が必要となる。今後の課題は、準備にあまり時間をかけずに、通常の授業で「コラボ授業」を行うことだ。

「異教科のTTを本校の特色として定着させるためには、ノウハウを少しずつでも蓄積していくことが重要です。国語のこの単元では数学とTTを行うというように、時期や単元を決めて毎年実施すれば負担もそれほど大きくならないはずです。指導案や教材を引き継ぎながら、そうしたノウハウを教科ごとに少しずつ増やしていき、TTを定着させたいと思います」（古閑先生）

「生徒の学習意欲の向上を学力につなげていくことも課題です。11年度入試では5年ぶりに国公立大合格者が出て、教師も生徒も意欲が高まっています。学校を元気にし、地域の期待に応えていきたいと思います」（田中校長）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2010年12月号指導変革の軌跡「岡山県立邑久高校」など
▶▶▶ http://benesse.jp/berd/ → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）

新担任への効果的な引き継ぎで4月のスタートをスムーズに切る

1年間の生徒情報を次の学年団に引き継ぐことは、
新担任のスムーズな生徒理解と生徒の気持ちの切り替えを後押しするために重要である。
また、上級生の経験を下級生に還元することは、先を見通した指導をする上で有効だ。
この時期の新・旧学年間における効果的な情報の共有について考える。

※このコーナーは、高校の先生方との会議を経て制作しています。掲載しているデータなどは、先生方が実際に活用されているものを基にしています。

1 【教師・生徒へのデータ活用】新・旧学年団で生徒・保護者情報を共有する

生徒の「ありのまま」を引き継ぐ

図1 生徒に振り返りをさせる「1年間のまとめシート」 ダウンロード

●今年度のあなたの10大ニュース

1位		6位	
2位		7位	
3位		8位	
4位		9位	
5位		10位	

「10大ニュース」は生徒を多面的に把握する際に生かす項目。学習面・生活面での点数をつけ、その理由を記述させることは、生徒に振り返りをさせると同時に、次年度から担当する教師の適切な声掛けを促し、各生徒の目標設定につなげる材料とする。

●今年度を振り返り、学習面・生活面での点数を100点満点で採点しよう

学習面　　点	生活面　　点
理由	理由

●今年度一番頑張れたこと

●今年度一番悔いが残っていること

●次年度の抱負

担任からのコメント欄

学年で検討する「余地」を残す

図2 文理選択での生徒・保護者の質問引き継ぎシート ダウンロード

時期	文理選択までの流れ	この時期の生徒からの質問	この時期の保護者からの質問
1学期末	学年集会で説明	・文理選択をすると志望変更できないのか? ・行きたい大学や学部がまだ決まっていないのに、どうやって選べばいいのか?	・どうしてこの時期に文理選択をするのか? ・どういう観点で選ぶべきか?
2学期初め	三者面談	・保護者は理系を勧めるが、自分は文系が合っていると思う。どうすればいいか? ・文理共に苦手科目あり。どう選択すれば良いか?	・本校では、理系の進学実績が良いように思えるが、文理どちらを選ぶかで有利・不利はあるのか?
2学期初め	保護者会	・仲の良い友達はみんな文系に進む。自分も文系に進んだ方がいい? ・文系理系どちらも興味があるのだけれど……	・子どもには理系クラスを勧めているが、こちらの言葉に耳を貸そうとしない。どこまで保護者は関与すべき?
2学期初め	文理選択シート提出	・社会と理科が得意なんだけど、文理どちらの方が合っているのか? ・次の模試結果が出るまで結論を伸ばせないか?	・実際に理系に進んで、もしも授業について行けなくなった場合、学校はどんな指導を行うのか?

ダウンロード このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/ →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

プラスαの指導

「点」の引き継ぎから「線」の引き継ぎへ

新学年団に生徒情報を引き継ぐ際に、その時点での生徒の状態だけでなく、4月から1年間かけて、生徒がどのように成長してきたかを伝えるように心掛けたい。長い時間の中での生徒の成長を語れるのは、生徒を間近で見てきた現担任だからこそ出来ることであり、成長のプロセスを「線」で捉えた引き継ぎは、新担任にとって貴重な情報となる。なお、現担任は「時間はかかっているけれども、1年間でこれだけ成長した」と、肯定的な視点で生徒を語るように心掛けたい。

担任だから気がつく項目にこだわる

生徒から収集した図1「1年間のまとめシート」に現担任がコメントを記入することは、現担任の思いを新担任に伝える効果もある。このとき、生徒自身が書ききれていないことはないか、担任だからこそ分かる情報が漏れていないかという点にも注意を払いたい。特に、「何か困っているクラスメートがいれば快く手助けする」「普段は目立たないが、役割を担えばしっかりとリーダーシップがとれる」など、担任だから気がつく生徒の資質はシートに記入し、生徒への激励と新担任への引き継ぎのメッセージとしたい。

「手応えのあった」行事を生徒と保護者の言葉で振り返る

進路関連の行事の成否は生徒一人ひとりの内面の成長にあるため、数値として評価しにくく、学年としての総括が行いにくい。そのため、あらかじめ決められた取り組みを無事にこなせたことで「何となく成功した」と総括されているものも多い。図2は次年度への引き継ぎ資料として紹介したものだが、このような資料を作成する過程で生徒や保護者の声を整理することで、行事がどのように受け止められたかを実際に行事を行った学年自ら振り返ることが出来る。次年度以降に行事を吟味する情報として、生徒や保護者の言葉を活用したい。

活用後のフォロー

◎旧学年団から新学年団へ引き継いだ情報がどのように活用されていくかは、新学年団の判断に任される。そのため、旧学年団から積極的にアプローチしていくことは難しい。だが、学校として、引き継ぐべき情報の提供や、必要とされれば情報の共有はいとわない姿勢を明らかにしておくことは必要だ。学年の「色」は残しつつ、学校のSI（スクール・アイデンティティ）やSIに基づいた取り組みを構築し、継承していくことは多くの学校にとっての課題である。図2のような「生徒・保護者の声」という切り口だけでなく、多様な方法を検討していきたい。

データ活用のねらい　新学年を尊重した引き継ぎを

生徒の「ありのまま」を引き継ぐ●次年度の学年団への引き継ぎでは、生徒のマイナス面のみを伝えがちだが、そればかりでは新担任は生徒に対して偏った先入観を抱きかねない。図1「1年間のまとめシート」を活用し、生徒の声を聴取することで、生徒の「ありのまま」の状況を引き継ぐことが出来る。生徒把握の資料として活用できるだけでなく、生徒自身が記入することで、1年間を振り返った上で新たな目標を設定するきっかけにもなる。

生徒・保護者からの質問を引き継ぐ●学校によっては、学年の「色」を尊重して旧学年団から新学年団への取り組みの継承をあえて積極的には行わないところもある。その場合、図2のように、生徒や保護者から疑問が出やすい文理選択などの取り組みに絞って引き継ぐのも一案だ。行事そのものが保護者や生徒にどう受け止められたのかを引き継ぐことで、新学年で検討する「余地」を残しつつ、取り組みの総括を引き継ぐことができ、学校として取り組みの充実が図られる。

データ活用の流れ　活用の主体は新学年団に

生徒の振り返りを教師の引き継ぎに活用●図1のように、学年で書式を統一し、現担任が生徒に1年間の振り返りを記入させる。書くことを通して生徒が深く内省するように、記入欄は大きめの枠を設ける。その後、現担任がコメントを記入してからコピーし、生徒に返却すると共に、次年度の担任団に渡す。新担任は直筆のシートから生徒のありのままを理解でき、新学期の面談にも活用できる。適宜フィードバックすれば生徒の自己変革を促すことが出来る。

「余地」をつくることで、学年団の結束が固まる●現学年団の教師に文理選択ではどんな質問が生徒・保護者から上がったのか、指導のプロセスに従い時系列で聞き取りを行う。それを学年代表の教師がまとめ、一覧化し、新学年団に引き継ぐ。

1年間の自分を振り返らせながら自己変革を促す

図1を配布。1年間を振り返り、学習や生活の状況、更に次年度の抱負を記入

▼

担任がコメントを記入し、コピーする。原本は生徒に返却し、複写したものは新担任へ引き継ぐ

▼

新担任はクラス運営の資料として活用。図2と合わせて、4月の時点での学年団での共有資料としてもよい

▼

4月に行う進路意識調査と合わせて、面談などで生徒に適宜フィードバックし、自己変革を継続的に促す

2 【生徒へのデータ活用】自校の先輩の声を活用して意識を高める

上級生に疑問をぶつけて意識を高める

図3 2年生から「3年生への質問状」&3年生からの回答 ダウンロード

●2年生から質問を聴取<高2→高3>

3年生への質問状

◎学習面で聞いてみたいこと

◎生活面で聞いてみたいこと

◎その他（進路選択など）

①2年生から質問を集め、教師が「2年生の意識付けに役立つのではないか」と感じるものを、3年生に投げ掛ける
②3年生から得た回答を、2年生向けにまとめる

●2年生から受けた質問を3年生が回答する<高3→高2>

質問 自分の行きたい大学が決められない時、どうやって決心を固めていきましたか

進学先	部活	質問への回答
○○大	サッカー部	先生や友達によく相談をしました。自分一人で悩んでいると不安になるばかりで、決心を固めるまでにはならなかったと思います。
△△大	バレーボール部	気になる大学に足を運ぶようにしました。自分がここで学ぶことをイメージできるかどうかが重要だと感じました。

質問 部活動と学習の両立が出来そうもないです。部活動を辞めようか迷っています

進学先	部活	質問への回答
■■大	野球部	自分も部活に疲れて家に帰るとすぐ寝てしまい、部活を辞めようか悩んだ。でも今振り返ると、受験勉強も部活の仲間がいたから頑張れた。部活を続けたからこそ受験も頑張れたんだと思う。
△△大	吹奏楽部	自分自身でじっくり考えて、先生や保護者に相談して決意するのであれば、辞めるのも一つの選択肢だと思う。

3年生の「声」で意識を高める

図4 3年生が証明する「A高校の定説」〈高3→高2〉 ダウンロード

A高校の定説	先輩の声
行事で盛り上がれるクラスは、受験でも良い結果が出る	・3年生の時のクラスは体育祭などで一番団結したと思う。しかし、行事のあとの切り替えやその後の学習への集中力もすごかった。
掃除が行き届いたクラスは、勉強にも集中できる	・3年生になって担任の先生が「教室を片付けなさい」と何度も言うようになった。最初は面倒だったけれど、きれいになると授業にも集中できたような気がした。
部活動を3年間続けた人の方が、入試を最後まで頑張れる	・部活動をしている時、いかにうまく隙間時間を使うかを考えていた。引退しても、その時に身についた効率的に勉強する姿勢が役立っている。
5教科以外の授業をないがしろにする人は、成績が伸び悩む	・芸術や家庭科の授業をマジメに受ける人は、5教科も当然マジメに受けているし、一部の授業をいい加減に受けている人は、結局、5教科でもいい加減だった。

ダウンロード このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/ →HOME>情報誌ライブラリ（高校向け）>生徒指導・進路指導ツール集

ウェブサイトからダウンロード！

生徒指導・進路指導ツール集

Benesse® 教育研究開発センター
http://benesse.jp/berd/
生きたデータの徹底活用 検索 クリック！
HOME→情報誌ライブラリ（高校向け）→生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください
加工可能な資料がダウンロードできます！

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！ 右のウェブサイトでご覧いただけます。

●2010年2月号
「次年度につなげる総括・引き継ぎと3年生からのデータ収集」

●2010年10月号
「生徒と教師の助走期間としての3年生0学期の意識付け」

プラスαの指導

2年生からの質問を蓄積し次年度の指導に生かす

2年生から3年生への質問は、教師にとって生徒がどんなことに悩みや不安を抱いているかを端的に表す資料となる。これを次年度に引き継ぐことで、新2年生担当の教師は先手を打って指導をすることが出来る。もちろん、生徒にとっては悩むことそれ自体が必要である場合も少なくない。すべて教師が先回りして答えを用意すべきではないだろうが、経験の浅い教師には2年生の内面を知っておくだけでも、安心して指導に臨めるはずだ。数年かけて蓄積すれば、生徒像の経年変化も把握できる。

大学進学後に「大学レポート」を募る

3年生に対しては、高校時代の体験を聞くことはもちろん、新年度が始まってからの進学先での生活の様子や、高校の学習と大学の学びのつながりなどを報告してもらえば、在校生の指導に活用できる資料となる。卒業式の前に、報告してほしい内容と提出時期を明記したプリントを渡しておく。新生活の慌ただしさから多くの生徒が忘れてしまい、実際に送られてくるレポートは僅かであるかもしれない。しかし、数は少なくても、戻ってきたレポートの価値は非常に高いことは言うまでもないだろう。

チェックシート化して自省を促す

高校生として守ってほしい約束事と、それが進路実現にとっていかに重要であるかを語る3年生の言葉を提示する図4は、そのまま下級生に提示するだけでなく、チェックシート化して取り組ませることも可能だ。「自分は実行できているか」を○×で記入させたり、×の場合は今後どのように改善していくのかを面談で尋ねたりする。3年生の経験を聞き「やっぱりそうなのか」と納得するだけでなく、一歩進めて、「自分を具体的に変えるにはどうすればよいか」まで考えさせたい。

活用後のフォロー

◎新年度の4月、5月という早い段階で「進級を契機に自分は変わったか」「変わろうとして変われないのはなぜか」を問い掛けて、うまく軌道に乗せる材料として先輩データを活用したい。特に受験を終えた3年生の体験を下級生に読ませることは、生徒の学習・生活習慣を変えるのに有効だ。新年度になり、生徒の変わろうという意識を見逃さず、データの活用を行いたい。

年度末の意識付けを徹底したからといって安心するのではなく、新年度の声掛けも入念に行いたい。生徒は教師が声を掛け、繰り返し考えさせることで、ゆっくりと変わっていくものなのだ。

データ活用のねらい　3年生となる意識を高める

自ら質問することで主体的な理解を促す●新しい1年がどんな1年になるのか、既にそれを経験した上級生に質問することで、今自分が抱えている悩みや受験生となることへの漠然とした不安と向き合うことになり、自覚的に進級させることが出来る。図3のように生徒が自ら考え、質問を出すことにより主体的になり、先輩からの言葉を更に感度高く受け取り、それをモチベーションにつなげていきたい。たとえ、質問の内容が教師が企図したものと同じであったとしても、生徒が自ら考え出した質問であるということに意味があるのだ。

自校の先輩の声で意欲を高める●特に2年生の場合、志望校合格のための1年が始まるという覚悟を持たせることが重要だ。受験生としての1年間を戦い抜いた自校の先輩のデータや声を有効に活用したい。「身近な存在だった先輩たちも頑張っていた」という事実が生徒の背中を押すと共に、図4を用いることでこの高校の3年生として頑張らなければという強い意識も生まれる。また、3年生にとっては、この学校の生徒として何を守ってほしいかという後輩へのメッセージにもなる。

データ活用の流れ　生徒、教師の聞きたいことを収集

3年生の「生の声」を2年生に届ける●図3の「3年生への質問状」のシートを活用し、2年生から3年生に聞きたい質問を集める。教師が質問を分類して、3年生に回答してもらう。可能な範囲で回答に多様性を持たせ、2年生に紹介する。自分に近い意識や立場の先輩の回答を読むことで、より納得感が高まるからだ。

教師が聞きたい話題も取り上げる●生徒からの質問では出にくいが、教師として取り上げたい話題もある。「予習復習の重要性」「授業中心の受験対策」などだ。教師が常に生徒に訴える「定説」について、3年生が結果としてどう感じたかを図4のように教師から質問する。生徒ならではの説得力ある言葉で証明してくれるだろう。

主体的な質問から受験生になる覚悟を持たせる

図3を配付し、2年生から3年生への質問を募る

↓

教師の目線で質問を分類。3年生に回答を依頼する（アンケート、あるいは進路が決まり余裕がある者へのヒアリングなど）

↓

集まった回答を精査し、2年生に提示する。この時に図4も合わせて共有することで、受験生になる覚悟を促す

↓

面談などで上級生の回答から得た気づきと、変えようと決意したことなどを確認する

文化的資本を活用する街づくりで都市の再生・発展を目指す

大阪市立大大学院　創造都市研究科　佐々木雅幸研究室

グローバル化の進展や産業構造の変化により、企業誘致や公共事業に頼る経済政策だけでは、都市の再生・発展は困難になりつつある。そこで近年、世界的に注目を集めているのが「創造都市（クリエイティブシティ）」だ。草の根的な市民の活動により、産業や経済、文化を活性化させる都市のことである。日本の創造都市論の第一人者である佐々木雅幸教授は、市民のネットワークづくりや啓蒙活動、行政との連携を通して、創造都市の可能性を追究している。

フローチャートで分かる佐々木研究室

大学院生の主な出身分野

- 経済学
- 法学
- 社会学
- 地理学
- 建築学

など

◎大学院生の出身学部は、経済学を中心に法学や社会学、地理学、建築学、政策学、都市計画学など幅広い。韓国、中国、ドイツ、ベルギー、オーストリア、アメリカなど、世界各国からの留学生も多い。

研究にかかわる学問分野と研究内容

◎「創造都市（クリエイティブシティ）」は、市民の創造活動によって先端的な芸術や豊かな生活文化、革新的産業を振興する都市のことで、環境や平和、失業などの問題を、草の根的に解決する力を持っているとされる。さまざまな角度から都市の在り方を考察するため、経済や法律、政策、建築、都市計画のほか、社会的弱者のための医学的知見なども必要となる。

研究成果と社会のかかわり

- 都市再生
- 文化政策
- 芸術振興
- 雇用創出
- ホームレス支援

など

◎各省庁やユネスコとの連携による都市政策研究やホームレス支援、行政やクリエイター、NPO法人のネットワークづくり、商店街の活性化など多岐にわたる。

幅広い教養と何度でも挑戦できる粘り強さが必要

都市論分野が求める学生像

幅広い教養

チャレンジ精神　未知の分野への興味・関心

私の母校は名古屋の東海高校という私立高校です。今思うと少し変わった学校で、勉強ばかりしている生徒はあまり尊敬されませんでした。勉強以外のプラスアルファがあって初めて、みんなから認められる、という雰囲気がありました。私も高校時代は勉強だけでなく、読書や演劇などにも打ち込みました。そうして学んだことが、今の研究にも生きています。都市論では経済学のみならず、芸術や文化、歴史など幅広い教養が求められます。さまざまな分野に関心を持って取り組める姿勢が必要です。

また、失敗しても、何度でも立ち向かう粘り強さも必要です。今の若い人は、簡単に出来ることしか手を出さず、一度失敗すると諦めてしまう傾向があるように思います。研究に失敗はつきもの。労をいとわず果敢に向かっていく姿勢を身に付けてほしいと思います。

そうした資質さえ備えていれば、性格が大らかでも神経質でも構いません。自分なりに教養を深め、不器用でも地道に挑戦し続けられる人に、この分野に進んでほしいと思います。

高校生へのメッセージ　人間は悩んだ分だけ成長します。学習や恋愛でも何でもいい。とことん悩み抜いてください。人との出会いも自分自身を成長させる大きな力になります。高校や大学で是非、よい先生を見つけてください。また、大学では専門外の学部の学生と交流することも、視野を広げる上で大切です。

佐々木雅幸　教授　Sasaki Masayuki

大阪市立大大学院創造都市研究科教授。大阪市立大・都市研究プラザ所長。同大グローバルCOEプログラム拠点リーダー。京都大大学院経済学研究科博士課程修了後、大阪経済法科大経済学部講師、金沢大経済学部助教授、同教授、イタリア・ボローニャ大客員研究員、立命館大政策科学部教授を経て現職。金沢市文化活動賞、日本都市学会賞を受賞。主な著書は『創造都市の経済学』（勁草書房）、『創造都市への挑戦』（岩波書店）など。

研究を志したきっかけ

グローバルシティに代わる新しい都市論の可能性

私は経済学部出身で、大学院では財政学を専攻しました。経済学者には国民経済を研究したがる者も多くいますが、私が所属した研究室はそうした傾向に一石を投じようと、環境や文化など、多面的な視点から経済学を追究していました。学部時代から都市の発展に関心があった私は、そうした研究室の空気に感化され、欧米と日本の都市経済や地方財政の比較研究など、研究者があまり注目しない分野の研究をしました。

やがて世界がグローバル化時代に入ると、都市論ではグローバルシティの研究が活発になりました。ニューヨークやロンドン、東京などの巨大都市がどのように変化していくのか、多くの研究者が注目しました。私も毎年ニューヨークに赴いては各国の研究者と議論を交わしたものです。

しかし、グローバルシティは弱肉強食の経済システムで巨大金融資本の思惑に左右されるため、非常に不安定で、成長と衰退という大きな波に巻き込まれる可能性があります。1990年代に入り、そうした危険性が浮き彫りになるにつれ、研究者は新しい都市像を研究するようになりました。当時金沢大に勤務していた私は、地方都市から世界を見つめる中で、グローバルシティに代わる都市の在り方があると感じ始めました。そして、さまざまな国際会議や調査に参加するうちに、これからは「創造都市（クリエイティブシティ）」という概念が主流となり、社会システム全体を見直す上で重要になるという考えに至ったのです。

研究概要

文化やアートが都市の再生・発展の原動力になる

創造都市は、市民の自由な創造活動により先端的な芸術や豊かな生活文化を育み、新たな産業を生み出す「創造の場」に富んだ都市のことです。グローバルシティの原動力が金融や不動産ならば、創造都市を動かすのは市民や企業の創造性なのです。

創造都市の意義に気付いた後は、毎年のニューヨーク行きをやめ、イタリアの地方都市ボローニャ[1]に赴き、

金沢とボローニャの比較研究を行いました。そして、創造性に富んだこれらの都市に、21世紀の理想の都市像があることを確信し、著書で明らかにしました。

本来、都市はそこに集まる人々が産業や文化を創造する場でした。しかし、産業構造の転換やグローバル化の影響などにより、多くが機能不全を起こしています。日本では今まさに産業の空洞化が深刻化しつつありますが、ヨーロッパではそれが20年ほど前に起こり、製造業を土台に発展してきた多くの都市が衰退しました。その要因を究明して創造の場としての都市の姿を取り戻すことも、創造都市論の大きな目的です。例えば、ボローニャには中小企業主体の柔軟なネットワークがあり、大量生産的でない、職人によるものづくりが生きています。街並みの保存に優れ、芸術文化や福祉を担う職人工房などの協同組合も発達しています。

金沢では都市の再生を目指し、90年代に大規模な実験が行われました。使われなくなった紡績工場の倉庫を改修して「[2]金沢市民芸術村」にし、市民が24時間自由に使える芸術創造・伝承の場としたのです。また、2004年には市民の発案により、学校跡地を利用して現代アートのみを扱う「[3]金沢21世紀美術館」を開館しました。スペインの工業都市として栄えたビルバオは、[4]ビルバオ・グッゲンハイム美術館という斬新な美術館が出来たことで一躍アートの町として再生し、世界中の注目を集めるようになりました。私たちはこの都市再生の成功例を基に市長に積極的に働きかけて開館に至りました。市民の創造活動を原動力とすることで伝統的にあった産業も更に発展し、都市の活性化につながりました。

現在の研究テーマ

都市の再生と社会的弱者の支援が研究の2本柱

研究室では、大阪を舞台に、新産業の創出、都市コミュニティーの再創造に取り組んでいます。大阪各所に設置した「[5]現場プラザ」を拠点に、コンサートや絵画展などのイベントの企画・運営、クリエイターを招いてのワークショップ、公開講座を通しての啓蒙活動などを行い、市民の創造的な力を引き出せる環境やネットワークづくりを進めています。都市の貧困や差別、住環境問題の解決も都市論の主要テーマであり、ホームレスや住宅困窮層など社会的弱者の就労・居住支援も行っています。

日本では景気が悪くなると公共工事の必要性が叫ばれてきました。今後はそれだけでなく、金沢のように芸術や文化を創造する市民の力を引き出すことが、都市の再生・発展のためにますます重要になるでしょう。

都市研究には尽きぬ泉のような魅力があります。掘れば掘るほど発見があり、新しい興味が湧いてくる。皆さんも自分の住んでいる町に目を向けて、改めて課題や魅力を見つめ直してはどうでしょうか。

写真　大阪市立長橋小学校の空き教室を活用して行われている製靴教室でのフィールドワークの様子

用語解説

❶ボローニャ
イタリア北部のエミリア・ロマーニャ州の州都。芸術、文化、ビジネスが盛んで、2000年度に「欧州文化都市」に選ばれた。

❷金沢市民芸術村
ミュージック工房、アート工房、ドラマ工房など七つの屋内施設と伝統工芸を伝承する金沢職人大学校を併設した市民のための多目的アートスペース。1997年に「グッドデザイン大賞」を受賞した。

❸金沢21世紀美術館
04年に金沢市中心部に開館したコンテンポラリーアートの美術館。「開かれた美術館」を目指し、展覧会のほか、子どもから大人までを対象とした教育普及プログラムの企画・実施、アート関連資料の提供などを行う。

❹ビルバオ・グッゲンハイム美術館
スペインのバスク自治州の工業都市ビルバオに97年に開館した近現代アートの美術館。カナダ出身の建築家フランク・ゲーリーの設計による奇抜な外観が話題となり、ビルバオを文化都市として飛躍させた。

❺現場プラザ
大阪市立大による都市研究のためのサテライト施設。アートカフェや集会・研修の場を各所に設置し、ネットワーク型の研究・街づくりの拠点として、市民のワークショップなどを展開している。

大学院生が語る

映画の自主上映活動で地方都市再生の道を探る

辻堅太郎さん
Tsuji Kentaro
大阪市立大大学院創造都市研究科
都市政策専攻修士課程２年
（鳥取県立鳥取東高校卒業）

Q なぜこの分野に進んだのですか

A 高校時代、鳥取県知事は改革派の片山善博氏で、「地域の自立と再生」を政策のキーワードに掲げていました。その影響を受けて、私は地域経済や地方自治に興味を持ち、県内で行われたシンポジウムや片山前知事が立ち上げた「鳥取自立塾」に参加しながら地域の自立について考えていました。

鳥取大地域学部地域政策学科に進学後、街づくりをされている方を大学に招いて勉強会を開いたり、中心市街地の活性化事業を企画・運営したりして、街おこしの取り組みを始めました。佐々木教授に出会ったのもその頃です。当時文化経済学会の会長をされていた佐々木先生の講演を聞いて創造都市論に興味を持つようになり、大学卒業後、大阪市立大大学院へ進みました。

Q 現在の研究内容を教えてください

A 鳥取市のような中規模の地方都市において創造都市論を展開する方策を研究しています。大学2年生から鳥取市で旧町役場の議場を利用して映画祭を行ってきたこともあり、メインテーマは地域で映画館を設立・運営している各地のＮＰＯ法人についての研究です。

日本には演劇や音楽などを対象とした文化政策が数多くありますが、映画は戦前にプロパガンダに利用されたという経緯もあり、政策がほとんどなされていません。そうした中、00年頃から埼玉県深谷市の「深谷シネマ」、群馬県高崎市の「シネマテークたかさき」などでＮＰＯ法人が、草の根的に映画の自主上映を行い、都市の活性化につなげている事例が見られるようになりました。

これらの活動を調査・研究し、地方都市において文化資本を蓄積していくにはどうしたらよいのか、アートを核に生活の質を向上させる方法について研究しています。将来は地元の鳥取市に帰り、行政職員として都市、文化の振興に携わりたいと考えています。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A ともすれば、高校生は自分たちのコミュニティーだけで過ごし、見えないものに関心を持ちにくい傾向にあります。いろいろな人と出会い、さまざまなことに関心を広げることが大切です。ただ、実際にそれを行うのは容易ではありません。特に地方都市は刺激が少なく、人との出会いも限られています。高校時代は勉強や部活動に打ち込んで毎日を充実させることに注力し、大学生になった時に世界を広げていく足掛かりを作っておくとよいかもしれません。そのためには、将来をしっかり見据え、志望を実現できる大学を選ぶことが大切です。

大学には、自分とは違う志向・志望を持つ学生が大勢います。そうした仲間から刺激をたくさん受け、興味を広げてください。専門外の先生にアドバイスをもらい、知見を広げるのもよいでしょう。大学をとことん活用して自分を高めていくことが、夢の実現につながるのです。

私の高校時代

合唱コンクールでクラスが団結

●高校時代の一番の思い出は、３年次の合唱コンクールです。母校の合唱コンクールは、文化祭の一環として秋に開催され、予選は学年ごと、決勝は全校で行われます。２年生の時、私のクラスは決勝まで進み、大いに盛り上がりましたが、３年生との力の差はいかんともしがたく、決勝で敗退しました。私も含めて、クラスメート全員が悔しがり、３年生になったら必ず優勝しようと皆で誓い合いました。３年生の合唱コンクールが近付くと、その時ばかりは受験勉強も忘れて、朝や放課後に集まって必死に練習しました。そして、ついに優勝の栄冠を手にすることが出来たのです。

クラスが一丸となれたのは、悔いを残したくないという思いを、皆で共有できたからだと思います。力を合わせて頑張った経験は、絶対に無駄にはなりません。皆さんも、悔いの残らない充実した高校生活を送ってください。

30代教師の転んでも起きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！

生徒の目線で教師の立場から自立的な学習へと導ける授業を模索

三重県立松阪高校 若宮一哉先生 38歳

わかみや・かずや　◎教職歴17年。同校に赴任して8年目。担当教科は数学。2学年担任。三重県立松阪高校　◎全日制・通信制／普通科・理数科／共学。10年度入試では、国公立大は、横浜国立大、名古屋大、三重大などに計112人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、早稲田大などに延べ541人が合格。

私が乗り越えてきたもの

生徒との距離感が分からない

「学校に行きたくない」。新卒で進路多様校に赴任した1年目、私は「不登校の状態」に陥っていました。赴任当初、若手の教師である自分に生徒たちは無邪気に近づいてきてくれました。ところが、それに甘えて教師としての立場をわきまえた指導が出来なかった私は、徐々に生徒との関係性をこじらせ、すっかり自信を失っていたのです。

その時、支えとなったのは先輩の先生の姿でした。生徒と楽しげに話をしながらも、叱る時はしっかりと叱る。また、授業も見事でした。自分がしたい説明ではなく、生徒の分かりやすさを重視した授業をしていたのです。生徒の目線に立ちながら、教師の立場でいること。先輩の背中から学び、必死に指導をするうちに、少しずつ生徒の顔が私の方に向くようになりました。

「厳しく学習指導をしてほしかった」

2校目に赴任したのは県内屈指の進学校、松阪高校。私は自身の高校時代を思い出し、自主性を重んじ、効率的な学習法を伝えることが教師の役割だと意気込みました。そのため、内容によっては課題提出や補修への参加は任意としました。

中には成績が下がる生徒もいましたが、「進学校の生徒だから、やる気になった時に勉強すれば伸びるだろう」と高をくくり、生徒任せの指導をしていたのです。しかし、3年生になって勉強し始めても、学力は上がりませんでした。私は慌てて補習の回数を増やしましたが、根本的な学習方法が身に付いていない者もおり、自分が生徒について何も見えていなかったことに気付きました。受験を間近に控えた生徒から「1年生の頃からもっと厳しく学習指導をしてほしかった」と言われた時は、自分が教師としての責任を果たせていなかったことを痛感しました。そして、生徒には「すまんのう」とただただ謝るしかなかったのです。

思い込みから生徒任せの指導をしていた

そして、これからも挑み続ける目標

数学の本質的な理解を目指す

「二度と生徒を後悔させたくない」という一心で、私は自分の指導を大きく変えました。授業では課題の量を増やし、提出を義務付け、定期テストで一定の点数を取れなかった生徒には補習を受けさせました。教師が何もせずに、生徒が自ら机に向かうのを待つのは、無責任な指導です。「とにかく学習させることが、教師である自分の責任だ」という気持ちでした。

結果として、受け持った生徒の成績は上がりました。ただ、同時に生徒の表情が気になり始めたのです。「先生の言葉に従って受験のために学習する」という姿勢になり、学びの面白さを感じていないように思われました。目の前の生徒たちにとって本当に必要なことは何か。私は多様校での教訓を思い返し、生徒の目線で教師の立場から、指導をもう一度見直しました。

生徒の数学への関心を高める授業とはどんなものか。考えた末に、生徒に解法を覚え込ませる指導から、その仕組みを理解させる指導に改めました。例えば数列では、各項に番号を振って規則性を示し、Σという記号の役割を解説。更に、習得した知識を活用して正解を導く練習として、公式の機械的な適用では解けない問題に取り組ませます。以前の効率重視の授業よりも、扱える問題数は減りました。しかし今は、数学の「やり方」ではなく「あり方」を伝えて、自ら学びに向かう生徒を育てたいと感じています。

他律から自立へ導ける指導を模索

松阪高校に赴任して8年目の2010年度は、3回目の持ち上がりで2年生を担任しています。解答を途中までしか書かない「ヒント集」を作成したり、「若宮からの挑戦状」と題して成績上位層に難問集を配布したりと、生徒に考えさせる工夫をしています。その成果として、生徒が自ら考え、難問に向き合う姿勢が育ちつつあります。単に公式を当てはめるのではなく、自分で考えて解く楽しさを知れば、生徒は自然と机に向かうようになる。そう実感できるようになりました。もっとも、今の指導で十分だとは考えていません。教師が現状に満足すれば、生徒はこれ以上伸びないのですから。

最終目標は、自立した生徒の育成です。進路実現に必要な学習計画を、自分で立てられるようになってほしい。究極的には、「今の自分にはこの問題集を解くことの方が大切だ」と、私がクラス全員に一律に与えた課題を後回しにするような、そんな生徒を育てたい。つまりそれは、教師である自分の手を離れていくということです。数学を入り口にして、自立して社会で生きていける力の育成を、教師人生で追究していきたいと思います。

生徒に考えさせ、自立につながる指導を目指す

若宮先生の授業実践 Q&A

Q 生徒が自力で考え、解法を組み立てることが出来るよう、指導をどう工夫していますか？

A 家庭学習用に生徒に配布している問題集の「ヒント集」を自作しています。生徒に考えさせる狙いから、解答をすべては書かず、途中から空欄にして配布します。数学が苦手な生徒も、解法を丸写しにするのではなく、考えながら解くことが出来ます。得意な生徒にも必要に応じて参照するよう指導しています。

またヒントは、すべて私が手書きします。「先生もこんなに頑張ってんねんで」という気持ちを伝えることが、「先生の頑張りに応えられるよう、手を抜かずに取り組もう」という生徒の意欲を引き出すのです。

Q 数学に苦手意識を持つ生徒が、モチベーションを維持しながら学習できるよう、どのような取り組みをしていますか？

A 定期テストの点数が一定以下の生徒に、週1回補習を課しています。しかし、間違えた問題を復習させるばかりでは、「ここが出来やんかったやないか」と生徒を責めるような指導になってしまいます。苦手意識を持つ生徒の意欲を更に削ぐようなことがないよう、復習に加えて、次の定期テストに向けた対策や授業の予習も行います。補習を受けた生徒は先取りして理解しているため、授業への集中力も増します。

出来なかったことを責める補習ではなく、「次」につながる補習を心掛けています。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す若宮一哉先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、若宮先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

▼

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

バックナンバーは Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。http://benesse.jp/berd/→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）

対談

対話を重視した授業で自ら学習に向かう力を育む

― 新課程での英語教育に向けて ―

新学習指導要領では、４技能を統合的に活用できる能力を育成するために、コミュニケーションを重視した英語の授業の必要性がうたわれている。新課程を機により効果的な指導を実践するための心構えを、教師経験のある研究者と現場の教師に聞いた。

コミュニケーション活動の意義
習得とアウトプットのバランスが学ぶ意欲を育む

編集部　新学習指導要領の英語の中では、コミュニケーションを重視した授業の必要性がうたわれています。そうした授業を行う際のポイントは何でしょうか。

西　私は授業で必ず「英語を使う場面」を設けています。例えば、生徒同士で日常生活について話したり、教材のテーマについて意見を発表したりといった活動です（**図1**）。ただ、「話す」「書く」といったアウトプットの活動は、「伝えたい」ことがあって初めて出来るものです。生徒の様子を見ながら、生徒が話したいと思えるような話題を選んだり、教材への関心を高めるためにイントロダクションで関連する話をしたりといった工夫をしています。具体的にいうと、**図1**の指導案では、トーテムポールを題材としているので、トーテムポールが作られた意義を理解できるように、イントロダクションで言語以外の伝達手段である「写真」の話をしました。

山岡　確かに、言語活動は伝えたいメッセージがなければ成立しません。いくら自分の意見を持つことが大切だといっても、自分とかけ離れたことに対して意見は持ちにくいものです。また、コミュニケーションをしようとする意欲も大切です。西先生の1年生の授業を拝見した際、生徒はけっして高度な英語を話しているわけではありませんでしたが「伝えよう」という意欲に溢れていました。

立命館大 教育開発推進機構教授
中央教育審議会 外国語専門部会委員
山岡憲史
Yamaoka Kenji
滋賀県公立高校で英語教員として教壇に立った後、立命館大に移り、現職。

広島県広島市立舟入高校
西 巌弘
Nishi Itsuhiro
教職歴15年。同校に赴任して10年目。教育研究部。担当教科は英語。平成19年度文部科学大臣優秀教員表彰受賞。

学校プロフィール◎全日制。普通科に国際コミュニケーションコースを設置。２００４年度から３年間、文部科学省のＳＥＬＨ-ｉの指定を受ける。10年度の進路実績（現浪計）◎国公立大は京都大、大阪大、九州大などに１６１人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ５３１人が合格。

西　伝えたいメッセージを持たせるために、教材には徳育的な側面のあるトピックを選ぶのが効果的だと思います。環境問題や情報社会の課題、日常生活に関することなど、生徒が関心のあるトピックならば課題意識を持って教材に取り組めますし、意見も持ちやすくなります。そうすると課題文から情報を読み取ろうという意欲が湧き、英語をもっと理解したいと思うようになるのです。本校は09年度から「全国高校生英語ディベート大会」に参加していますが、教師が何も指示をしなくても、生徒が自分で何をすべきかを考えて準備に取り組む様子が見られます。

山岡　教材に課題意識を見いだせれば、勉強だから仕方ないと取り組んでいたものが、能動的な姿勢に変わり、情報を求めて読むようになります。また、こういう英文表現の仕方もあるんだと気付くようにもなるのです。これを繰り返すことによって、どのような教材でも自発的に読み、学び取ろうという姿勢が身に付くと考えます。

西　学習指導要領にも示されていますが、社会で生きる力、社会で役立つ力を育むためには、教科学習でも課題意識を持ちやすい話題を取り入れ、生徒に考えさせ、更にその考えをアウトプットさせることが必要だと思います。

山岡　言語の習得だけを目標としない授業が、結果的に最も英語の力を伸ばすと考えてもよいのではないでしょうか。

コミュニケーション活動の工夫
誰でも守れるルールを作り生徒の活動を促す

編集部　生徒の意欲を引き出すために、授業の中ではどのような工夫が考えられますか。

山岡　意欲を育むためには、1年生から英語を使う活動をどんどん取り入れることが重要でしょう。3年生になり英作文が大学入試で必要だから勉強させようとしても、伝えたいことがなければ丸暗記するだけになってしまいます。

　高校入学時の生徒の英語力はばらばらですから、活動しやすいように簡単なルールを決めるとよいと思います。中学時代はどのような英語の授業を受けていたか分からないけれども、高校での英語の授業はこういうものだと、体に染

図1　コミュニケーション活動を取り入れた指導案

No.	時間	活動	内容	使用教材	狙い
1	2分	ウォームアップ	ペアで交互にA～Zで始まる英単語を言う。Zまで終わったら座る。		既習の英単語の「ひきだし」を刺激する。これにより、授業中の英語に対する反応が良くなる。
2	8分	2分間チャット	与えられたトピックについて、ペアで2分間会話する。2分経ったら会話を止める。 Do you often take pictures? Yes.→Why? ／ No.→Why not?		レッスンを通じてのテーマ（例:トーテムポール）に触れる。身近な事象と関連・対比できるようにする。 ＊トーテムポールは、文字以外の方法でエピソードを後世に残す役割があるので、写真と関連付ける。
3	2分	オーラル イントロダクション	教師の話を聞く。教師は英語でトピックについて話す。		トピックへの生徒の関心を高める。
4	8分	リスニング コンプリヘンション	CDを聞き、聞き取れた内容をペアで話す。	音声CD	トピックについての内容理解と、英語音声への関心を引き出す。
5	15分	リーディング コンプリヘンション	テキスト本文を読み、QAシートに解答を書く。制限時間は10分。その後、ペアで解答を比べ、正解を確認する。	テキスト QAシート	リスニングでの理解を確認するために行うリーディング活動。明示的な質問で「どの部分に答えるか」だけに注目させる。
6	5分	語彙・表現	テキスト本文を見ながら、語彙・表現の意味と発音を確認する。	テキスト	音声・文字・意味のつながりを深めるための反復練習。次の音読に集中できるよう、語彙表現の音声に対する心理的な抵抗を取り除く。
7	5分	音読	テキスト本文を音読する。	テキスト	内容理解につながる音読活動を行い、英文に親しむ。英文への心理的な抵抗感を取り除く。
8	4分	シャドーイング	❶ 教師がスピードを上げながら音読（または音声CD）するのに合わせて行う。 ❷ ペアで行う。	音声CDなど	音読の到達度を確認する。
9	1分	まとめ	宿題の確認。テキストの練習問題（内容理解問題）と音読を課す。		テキスト本文の内容理解を深め、次の時間の表現活動につながるよう復習する。

＊西先生の資料に基づいてGTEC for STUDENTS編集部で作成

み込ませていきます。「大きな声で話す」「相手の目を見て話す」と誰でも出来ることを決まり事にして、それが守られていればとにかく褒めるのです。ここでは意欲を引き出すことが目的ですから、文法や単語を間違えたとしても、褒めた後で、言い直すための表現方法を教えればよいでしょう。

西　私の授業でも、音読をする時は姿勢を正す、立って発表する時は椅子を机にしまうなどのルールを決めています。英語の活動も最初は型にはめておき、徐々に自由度を増すようにしています。そして、生徒の発言から良いところを見つけて褒める、机間巡視中に良い表現を聞きつけたら最後にみんなの前で発表させるなど、表現することは楽しい、面白いという気持ちが持てるようにしています。

生徒の状況を把握した上で活動させることも心掛けています。体育の後の授業では、生徒の疲労度を見定めて活動を選びます。また、失敗したくない気持ちが強いのに活動させてもうまくいきません。そうした生徒の様子を見ながら、活動内容を選んでいます。

大学入試とコミュニケーション活動
音声、文字、意味を関連付けた活動が英語指導に有効

編集部　授業ではコミュニケーション活動を行う一方で、大学入試合格のための学力を付けることも求められます。

山岡　大学入試でスピーキングや英作文があまり課されないという理由から、コミュニケーション活動はこれまで授業で軽視されがちでした。しかし、学んだことを定着させるためには、アウトプットをさせた方が効果的です。

西　同感です。私は「聞く、話す、読む、書く」のうち「話す」をもっと授業に取り入れてもよいのではないかと思います。言葉は「音声」「文字」「意味」の三つの要素で成り立っています（**図2**）。単語を発音して覚える生徒は多いですし、黙読をしても頭の中で単語を読み上げているはずです。つまり、音声は英語を学ぶ上で重要な役割を果たしています。4技能をバランスよく学んでこそ英語の力が付くと考えます。

山岡　能動的に読む姿勢も重要です。センター試験の長文読解の語数は高校3年間で習う総語彙数の10分の1ほどになります。難関大の入試では一つの課題文で2000語もある問題が出ます。最近では、単純な英文和訳の問題ではなく、趣旨を日本語で要約させる問題や、課題文に対して意見を英文で書かせる問題が目立つようになりました。このような問題に対応するためには、受け身の態度で英文を読むのではなく、主体的に要点をつかんで読む姿勢が不可欠です。一語一語を訳して読み進めるのではなく、能動的に情報を求めて読む訓練が必要です。単語の暗記や和訳の学習も必要ですが、入試に対応する学力を付けるためにも、あまり詳細にこだわらず、スキャニングやスキミングなどで読解力を伸ばすことが重要です。音声、文字、意味のバランスがとれた学習が大切なのです。

図2　言葉の3要素と指導の関係

＊西先生の資料を基に編集部で作成

これからの指導の在り方
今までの指導を振り返り「旧」と「新」を融合させる

編集部　今までの指導をどのように変更すれば、コミュニケーション活動を効果的に取り入れることが出来るのでしょうか。

山岡　コミュニケーションを取り入れた授業というと、今までの指導をすべて変えなければならないと考える先生がいるようですが、それは誤解です。従来の指導にも良い面はたくさんあります。文法の構造をしっかり押さえること

や、単語を覚えることも英語学習には欠かせません。今までの授業の良い面は継承しつつ、今の指導では不十分なこと、すなわち自己表現を見据えたインプットの方法やコミュニケーション能力を伸ばす指導法を模索していくのです。

西　私も、今までと全く違う指導をする必要はないと思います。今、目の前にいる生徒をしっかり見て、足りない力は何か、力をもっと伸ばすために必要な指導は何かを考えて授業をすることこそ大切だと思います。英語は一つの教科を複数の教師が教えますから、教科内で生徒をどう育てたいのかを目線合わせすることも重要です。

山岡　新課程では英語の科目構成が変わるため、授業内容の組み直しも課題となります。「オーラル・コミュニケーション」の科目がなくなりますから、ＡＬＴとのチーム・ティーチングはどの授業で行うのかを話し合う必要がありますし、リーディングやライティングの区分けがなくなりますから、１年生からライティングを取り入れてみたり、文法をリーディングに絡めて指導したりと、これまでとは違う指導の工夫が考えられるはずです。新課程はこれまでの指導を振り返り、今後どのような指導をしていけばよいか、教師間で話し合う良い機会になるでしょう。

指導法改善の考え方
客観的な生徒把握を基に校内での目標を定める

西　目線合わせとして分かりやすいのは、数値目標だと思います。本校の国際コミュニケーションコースでは、卒業までに1分間に75ワードを話せることを目標にしています。

山岡　Can-doリストを作り、技能ごとの到達度を設定することも重要です。大切なのは、生徒把握をしっかり行い、目標を設定することです。

西　以前、勤務校で生徒の家庭学習時間が減っているのではと指摘されたので、2年生の家庭学習時間を調査したところ、前年度の1年生の時よりも増えていました。精一杯努力している生徒に「もっと努力しろ」と言ったら、意欲を削ぐことになりかねません。感覚やイメージではなく、客観的な情報から生徒を把握した指導を考える重要性を痛感しました。

山岡　客観的なデータを指導につなげる方法として、生徒へのアンケートも有効です。例えば、4月に新しい指導を取り入れたら、1学期の終わりにそれに対する評価を生徒に聞き、2学期に改善するのです。

西　私も独自に授業評価アンケートを行っていますが、最初に生徒に授業への取り組み方、予習・復習や授業態度などを自己評価させてから、授業評価をさせる構成にしています。

山岡　生徒に学習姿勢や英語の力の自己評価、授業に取り入れてほしいこと、もっと伸ばしたい力などを聞いてから授業評価をさせることで、教師の生徒把握に役立つだけでなく、生徒が自己を振り返る機会にもすることが出来ます。

西　普通科には多様な学力と意識を持つ生徒が入学してきます。英語の学習がしたいと本コースを選ぶ生徒でも、高校入学時の英語レベルはさまざまです。しかし、多様な学力を持つ生徒たちがいるからこそ「学校」なのですし、ばらばらの学力を一定水準にまで引き上げられるように授業を工夫することが、教師の指導力、ひいては学校全体の指導力を高めるのだと思います。新課程は、学校としてどう指導するのか、目標を見据える良い契機になると思います。

編集部　本日はありがとうございました。

今号の視点

学生主導型の改革・改善を取り入れる大学

教育を提供する大学と、教育を受ける学生――。そうした既成の図式を打ち破り、学生自身がより良い大学づくりに能動的にかかわっている大学がある。学生の意見を直接吸い上げて改革の有効性を高めると共に、学生に課題解決の過程を経験させることでキャリア教育にもつなげている。

「教育は与えてもらうもの」という学生の意識を転換

授業改善や環境整備といった大学改革は、教職員主導で行われることが多い。授業評価アンケートなど、学生の声を吸い上げる仕組みは浸透しているが、それ以外に学生が教学内容の改革にかかわることは少ない。

そうした中、学生が主体的に改革・改善にかかわる仕組みを取り入れる大学がある。これは、大学改革をより効果的なものにするだけでなく、「教育は与えてもらうもの」と考えがちな学生の意識を変え、当事者意識を持って能動的に動く学生を育成するという狙いもある。社会が求める人材は、まさにこうした学生である。

今号ではそうした取り組みを二つ紹介する。

授業や教育環境を学生主体で改善する

岡山大「学生参画型の教育改善」

「知ってるつもり？　コンビニ」「君は頭が良くなりたいか～発信力～」などの教養教育科目の新設、新入生対象の履修相談会など、岡山大には学生の提案を基に実現した大学公式の取り組みがある。推進主体は、学生約30人と教職員十数人から成る「学生・教職員教育改善専門委員会」で、他の教職員主体の委員会と同等の決定権のある組織だ。この取り組みは、2005年度から4年間、文部科学省の特色GPに選定された。

岡山大が学生参画型の教育改善組織を立ち上げたのは01年度のこと。授業改善に組織的に取り組む必要性が叫ばれ始めた時だった。

教育開発センターFD部門長の橋本勝教授は、「本学では比較的早くから教育改革の意識がありましたが、教員だけの活動には限界がありました」と振り返る。教員がよかれと思って行う授業が、必ずしも学生が力を付ける授業とは限らない。授業に対する学生の意見を聞くことで、教員間に授業改善の基準などが浸透するのではないかと考えた。橋本教授は、「そのためには授業を受けている学生自身の意識を高め、彼らを改革に巻き込む必要があると感じました」と話す。そこで、継続的に教育改善

にかかわる組織「学生・教員FD検討会（当時）」を立ち上げた。

学生委員の任期は1、2年生の2年間で、全11学部からそれぞれ1人以上が選出される。選出方法は学部に任せられ、教員や学生委員が説明会を開いて立候補を受け付ける学部や、ジャンケンで決める学部とさまざまだ。橋本教授は「熱心な学生に限らず、いろいろな意識の学生がいた方がよいと考えています。多くの学生はそれほど学習に熱心ではないという前提に立っているため、多様な意見を聞きたいからです。ジャンケンで負けて仕方なく参加したものの、活動しているうちに熱心になる学生もいます」と話す。

学生委員はワーキンググループ（WG）に分かれて活動する。そこでは、教職員がテーマを提示せず、学生自身の問題意識を重んじる。WGの内容は年度により異なり、10年度は「授業改善」「システム改善」「学生交流」の三つのWGがある（**図1**）。活動はすべて学生に任せるが、月1回は学生と教職員による全体会議を開く。この会議での決定事項が全学の方針となるため、教職員は学生の議論の方向や企画内容に鋭い指摘をする。

最初は教職員にリードされながらでも企画が実現することによって、学生は達成感を感じる。その過程が学生を大きく成長させ、次の活動につながっていくという。

図1　岡山大 学生・教職員教育改善専門委員会の活動内容

ワーキンググループ	主な活動内容	主な成果
授業改善	・授業の改善に関する活動 ・新しい授業の創作に関する活動	「This is Okayama」「君は頭が良くなりたいか～発信力～」（いずれも2008年度）「知らなきゃやばい、大人のマナー」（09年度）などの教養教育科目を開講
システム改善	・物理的な勉学環境の改善 ・修学上の制度の改善	履修科目登録数の上限を決める制度などについて、各学部で調査を実施
学生交流	・教育改善学生交流の開催 ・新入生のための履修相談会の実施	02年度から毎年、新入生のための履修相談会を開催、教育改善学生交流（i*See）を開催

＊大学資料を基に編集部で作成

より良い大学づくりを目指し実現可能性にこだわる

委員会発案による正課科目は、これまで延べ9科目が開講された。これは、1セメスター全15回で行う教養教育科目で、委員会は授業内容や評価方法などを企画し、担当教員は公募で学生による面接で決定する。今まで開講された科目は、大学のディプロマ・ポリシーと合致するものと判断されている。

学生が提案するといっても、単に自分たちが楽しめる授業をつくるわけではない。授業を受けるのは発案者ではなく後輩となるため、学生は次の世代に何を残すのかという視点で内容を考えるという。

開講された科目の中でユニークなのは「大学授業改善論」だ。授業内で学生が数人のグループをつくり、自分たちの履修科目から一つを選び、授業改善の意見書をまとめる。意見書を「大学授業改善論」の授業で発表し、受講者の過半数が賛同すれば、教員に直接交渉するという内容だ。毎年十数人の教員に改善を提案している。

学生発案の企画が、大学公式行事として定着したものもある。02年度に始めた新入生向けの履修相談会だ。この行事の立ち上げにかかわった学生委員1期生で、現在は担当職員の山内源氏は、「新入生が授業内容を理解していないまま履修登録している状態を改善しようと始めました。今は公式行事として全学で開いています」と話す。

学生交流WGの新リーダーとして11年春の履修相談会の準備を進める工学部1年の川田純也さんは、「入学当初、授業や履修相談会に不満がありましたが、いざ自分がそれを変えられる立場になると、責任の大きさを感じます」と気を引き締める。

今後の課題は、委員会の知名度を上げることだ。理学部1年の秋吉秀彦さんは「学内で委員会を知る学生はほとんどいないため、イベントなどで周知を図っています」と話す。また、学生委員が1、2年生のため、ノウハウの継承が難しいことも課題だ。3年生や大学院生に引き続きかかわってもらう仕組みづくりを模索している。

大学の運営や改善に学生が参加する

嘉悦大「学生が大学運営にかかわるプロジェクト活動」

嘉悦大には、学生発案の企画に大学が予算を付けて事業化し、学生自身が運営している活動がある。

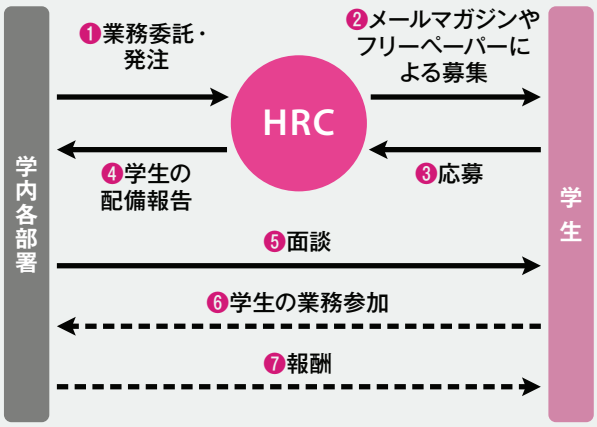
その一つは、「ヒューマン・リソース・センター（HRC）」という学内人材派遣センターだ。オープンキャンパスの学生スタッフやコンピュータ室のアシスタントなど、大学は自学の学生をアルバイトとして雇用する機会が多いが、HRCはそうした学生スタッフを各部署に紹介する業務を行っている（**図2**）。以前は、各部署がそれぞれ募集していたために効率が悪く、応募者が少ないことから人材のミスマッチも多かった。そこで、雇用窓口を一本化して効率化を図ると同時に、HRCの運営学生と学生スタッフ双方のキャリア形成を支援しようと、09年に設立された。

学長補佐の杉田一真専任講師は、「本学の周囲には中小企業がたくさんあり、近隣からの入学生も大勢います。地域に還元する人材を育てることが本学の果たすべき使命だと考え、学内で学生のキャリア形成の場が持てないかと模索していました」と話す。

派遣先は、図書館やパソコンのヘルプデスク、オープンキャンパスの運営スタッフなどさまざま。授業の空き時間を利用して働けることもあり、人気業務には応募者が多く、厳しい選考がなされるという。杉田講師は、「社会に出る前に選抜される経験をしてほしいと思っています。もし選考に漏れたとしても、次にまた挑戦しようと思えるように、HRCのスタッフや教員がフォローできます。そうした積み重ねが、学生の成長につながると考えています」と話す。

更に、学生同士のタテの学び合いを促すことも、この活動の狙いの一つだ。例えば、各業務の新人スタッフの育成は、先輩の学生スタッフに任されている。杉田講師は、「最初にロールモデルとなる学生を育てることまでが、教職員の仕事です。ロールモデルとなった学生が見込みのある後輩をスカウトし、育成することによって、その後は教職員が手を掛けなくても、学生のみで自立的に運営されていきます」と説明する。

図2　嘉悦大 ヒューマン・リソース・センター（HRC）の役割



HRCの運営は3人の学生が行う。オフィスはなく、インターネットでの作業が中心。各部署からの募集に対し、充足率はほぼ100%だ
＊大学資料を基に編集部で作成

キャンパスの美化を学生プロジェクトで実現

もう一つ代表的な事業である「コロキレイプロジェクト」は、学生のマナー向上を目的として、十数人の学生スタッフが、毎日交替で昼休みにタバコのポイ捨ての本数を調査しながら清掃するという活動だ。09年夏に、経営経済学部3年生（当時）の根本大輔さんが、大学に対する地域住民からの評判の悪さを目の当たりにしたことをきっかけに立ち上げた。

「杉田先生の授業で学内のフリーペーパーを制作する課題に取り組んだ時、近隣の商店を数十軒回って広告の掲載をお願いしましたが、すべて断られるという苦い経験をしました。その一因には、学生のマナーが悪く、地域に迷惑をかけていたことがありました。マナー向上のために何かしたいと杉田先生に相談したところ、予算を付けて事業化することになったのです」（根本さん）

プロジェクト名には、対症療法的に喫煙マナーを改善するのではなく、誰に言われなくてもマナーや礼儀を守れる大学にしたいという願いを込めた。現在は活動の効果もあり、喫煙マナーは確実に向上した。また、大学の予算で運営しているた

学生VOICE

後輩たちのためになる授業を計画中

岡山大
工学部機械工学科1年
高橋雄大
（愛媛県立西条高校卒業）

私は、どちらかといえば学習よりも大学生活を楽しみたいと思って入学しました。学生・教職員教育改善専門委員会のことは知りませんでしたが、高校で同級生だった川田君（本文に登場）に誘われて委員になりました。

今は、授業改善WGで授業評価アンケートの改善に取り組んでいます。例えば、本学ではウェブサイトを使っていつでも授業に対する意見を送れるシステムがありますが、利用者はほとんどいません。どうしたら利用者が増えるのかを模索しています。

活動の中心は2年生で、私自身はまだまだサポート的な立場です。それでも先輩と一緒に活動したり、イベントで教授や他大学の学生と話したりしているうちに、この委員会が面白いと思えるようになりました。

授業改善WGでは、11年度に教養教育科目の新しい授業づくりに挑戦しようという話が持ち上がっています。学生が欠席したり、居眠りをしたりせず、面白いと感じて参加してもらえるような授業をつくるのが目標です。

HRCなどを通じて周りの学生に影響を与えたい

嘉悦大経営経済学部
経営経済学科3年
関谷朋美
（東京都・白梅学園高校卒業）

2年生の時にHRCの設立に携わって以来、センター長を務めています。

この大学が第1志望ではなかった私は、入学当初はあまり意欲的ではありませんでした。このままでは自分が駄目になると感じていた時に、キャリア教育を推進するNPO法人カタリバによる初年次教育に参加し、「自分で大学をつくり変えていけばいいんだ」と気付きました。杉田先生から「学生を生き生きさせる組織をつくるから、参加してみませんか」という話があり、HRCを立ち上げました。最初は試行錯誤の連続。認知度が低く、募集をしても学生が集まらないこともありました。そこでポスターの掲示や冊子の配布、口コミなどで周知を図っていきました。

私はHRCの他にもカタリバの活動やアルバイトもしています。一つのことを始めて楽しくなると、いろいろなことに挑戦しようという意欲が湧いてきます。高校時代は内向的で人と話すのが苦手だった自分が大きく変わりました。将来は人の力を引き出すような人事の仕事に就きたいと考えています。

め、活動の経過をレポートにまとめ、大学に報告している。

根本さんが2年生だった08年度は、新学長が就任し、大学改革が始まった年でもある。根本さんは、「講義形式の授業が大幅に減り、プレゼンテーションやディスカッションが増えました。大学の雰囲気が大きく変わり、今では学生の顔つきが当時とは全く違います」と話す。

「どちらの取り組みも、制度をつくってから参加者を募集したわけではありません。起点となるのは、授業です。初年次教育で基礎学力をしっかり付けた上で、専門科目で学生の心に種をまき、具体的な活動として花開かせるのが授業外というわけです。そして、活動に必要な知識や技能が分かったら、再び授業で学びを深めるというサイクルにしています。この一連の流れを大学が提供することで、教員が学生のキャリア形成を支援することが可能になります」（杉田講師）

現在、それぞれの活動は後輩への引き継ぎ方法を模索中だ。HRCはいずれ株式会社化し、学外に学生を派遣したり、学外の人材を学内に派遣したりといった事業展開を構想している。

進路指導に生かす

教育や改革への本気度を知る手掛かり

大学の改革に学生を巻き込む方法や、巻き込む学生像は異なるが、共通しているのは、改革・改善に学生を参加させることで、改革を効果的なものにするだけでなく、社会で通用する学生を育てるという教育的側面だ。

大学が、どのような意図を持ち、どこまで深く学生を参画させているのか。これは改革や教育に対する大学の本気度を知る大きな手掛かりになると共に、大学のキャリア教育に対する姿勢を見ることも出来る。進路指導の際には、大学改革や授業改善の方向性だけでなく、プロセスにも注目してほしい。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。

e-mail:
view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

読者のページ

VIEW'S SQUARE

Volume 6

教育最前線からのホットな話題を紹介します

評価を指導改善に生かすポイントは

12月号の特集を読み、評価を授業に生かすためには、まず「評価とは何か」を教師自身が問い直すことが必要だと感じた。目標を設定し、それを達成する過程があり、何らかの形でその効果測定をし、目標に近づいたかどうかを測る。そういった考え方を、生徒以前に教師が持っていれば、授業評価も有効に働くはずだ。その意識がなく、生徒を評価している教師が多いのではないか。その意味で、今回の特集は「評価」という教育になってはならない概念を改めて考え直すきっかけをくれたと思う。

［愛知県立安城東高校・江崎寛］

取り組みを「点から線に」する工夫が参考に

12月号「指導変革の軌跡」で紹介された長野県長野高校は本校の取り組みと類似した実践が多くあり、親近感を覚えた。また、学年通信に載せる生徒のコメントに前向きなものばかりを選ばないなど、取り組みの随所にひと工夫が施されている点に感心した。取り組みの効果にプラスアルファを生むためには「点」ではなく「線」の指導が重要で、そのためには、二の矢、三の矢を放っていく必要があると改めて感じた。「3年生の夏までの間で勉強に打ち込めるのは、2年生の後期だけ」と言い切ってしまう思い切りの良さが、指導に勢いを与えているのだろう。

［滋賀県立守山中学・高校・堀浩司］

生徒の主体性を引き出す機会をいかにつくれるか

12月号「指導変革の軌跡」では岡山県立邑久高校の実践が大変参考になった。生徒が静かで授業態度が良いからといって、授業を理解しているわけではないというのは、本校でも同じことが言える。生徒指導で大変だった学校が落ち着きを見せ、授業も静かになり、生徒が提出物をきちんと出すようになっても、学力が定着しているとは言えない。「ただ言われたことをしているだけ」というのを教師が受け入れられないことも多くあるからだ。「勉強が出来ないから」と諦めてしまうのではなく、主体的に学ぶ意欲を持つことが出来るよう、教師がチャンスをつくり出し、可能性を伸ばすことがいかに大切か、改めて感じた。

［埼玉県立草加西高校・酒井直人］

「振り返り」の重要性に気付かされた後の伸び

12月号「生きたデータの徹底活用」を読み、入学時には学年で目標を立てて取り組むが、3学期になるとその取り組みへの振り返りを行っていないのが現状であると気付かされた。教師側が学年を通じて組織的に振り返りを行うことが、次年度への生徒把握につながることは言うまでもない。生徒だけでなく、教師をまとめる上で、指導の振り返りを行う必要性があると思った。

［東京都・匿名希望］

教師川柳

卒業を 迎える顔に 曇りなし

兵庫県・とんちんかん

Benesse教育研究開発センター ウェブサイトを是非ご活用ください

◎情報誌ライブラリ
『VIEW21』小学版・中学版・高校版のバックナンバーが無料でご覧いただけます。

◎調査研究データ
独自の調査・研究データを自由にご覧いただけます。
注目の最新調査も随時アップ中!
「学校外教育活動に関する調査」
「都立専門高校の生徒の学習と進路に関する調査」
「第2回子ども生活実態基本調査」

キーワードや学校名での検索も可能! また、「生きたデータの徹底活用」コーナーでは、便利な指導ツールがダウンロード出来ます。

http://benesse.jp/berd/

編集後記

「指導変革の軌跡」で熊本県立高森高校のチーム・ティーチングの授業を取材しました。授業中に生徒が「分かった！」と顔を上げた瞬間があり、その体験を足掛かりに次の課題に打ち込もうとする姿を見ることが出来ました。先生方も生徒の変化を感じ、本当に楽しそうに授業をなさっていました。「分かる」喜びが生徒の学ぶ意欲を育て、そして生徒の成長が教師のやりがいにつながることを改めて感じた授業でした。（佐藤）

VIEW21 2月号 Vol.6　2011年2月25日発行

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　(株)ベネッセコーポレーション　Benesse教育研究開発センター
印刷製本　大日本印刷(株)
編集協力　(有)ペンダコ
執筆協力　中丸 満、山口慎治
撮影協力　坂井公秋、谷口 哲、ヤマグチイッキ
イラスト協力　山本重也

VIEW21編集部　＊2011年2月21日に移転しました
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階
電話　03-5320-1287

©Benesse Corporation 2011

VIEW21 2011 April 4月 Volume 1

次号は 4月1日発行（予定）
『VIEW21』高校版は年6回の発行です